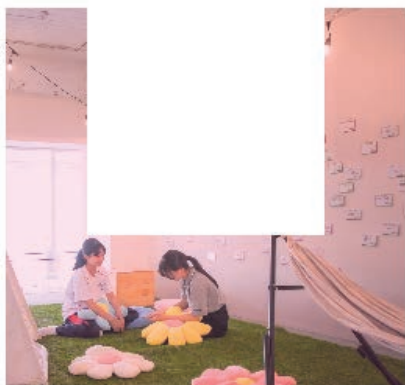


Project Report



Urban Design Smart City School
MATSUYAMA 2024

2024.7 - 2025.1

はじめに

アーバンデザイン・スマートシティスクール 2024「地域デザインミュージアムをつくる」では、銀天街・垣生・桑原に加えてパーソン・トリップ調査を使った市民生活の対話と都市 OS の実装に多くの受講生が挑戦した。地域に根ざした私たちの闊達な活動は文化庁のミュージアム・トップマネジメント研修の講義で取り上げられるなど、全国的に注目される活動となっている。受講生たちが積極的に取り組んでくれていることにはそれぞれ理由があるのだろうけれど、地域資源を文化的な視点から定義する方法はいくつかあるとして、近世城址や道後温泉という立派な資源があるにもかかわらず、そのような松山中心の地域資源ではなく、昭和や平成の大合併前の松山の地域の成り立ちや市街化調整地域にある旧村集落の地域に着目して、自ら地域資源を発見する行為そのものが、おもしろいのではないだろうか。

郊外という言葉を使わずに、垣生地区や桑原地区の歴史や地形に根付いている独自の魅力や課題に対して受講生自身が発見的なまなざしを向けていたことが印象に残っている。垣生村のたこ飯ワークショップのように、地域で継承されてきた食べ物を、地域で暮らしてきた人々が、若い世代の親子に手取り足取り、タコの捌き方から教える。タコと和える胡瓜の絞り方まで教わるという、地域デザインミュージアムで繰り広げられた親子の共通体験は、家に戻ってどんな会話に発展するだろう。有名な絵画でなくても、著名なアーティストや文化的な活動でなくてもいいのではないか。そんな思いが、アーバンデザイン・スマートシティスクール松山の運営の根底にあることは確かだ。

スクールの活動が、まちなかから、松山市の旧村へと発展的に広がっていくことで、松山市がより自分らしく生きていけるまちになるように、そのためのヒントがみつかるように、松山の各地で展開されようとしている地域デザインミュージアムが、そんな場所になるといいなと思っています。さまざま視点から受講生に向けていただいた講義や地域での活動支援など、協力していただいたすべてのみなさまにお礼申し上げます。

アーバンデザイン・スマートシティスクール松山 スクール長
松山アーバンデザインセンター センター長／東京大学大学院 教授 羽藤英二

Table of contents

Introduction

P01 「アーバンデザイン・スマートシティスクール松山」とは

Schedule

P02 実施スケジュール

Opening ceremony

P04 開講式・ガイダンス

Lecture

P05 01 まちあるき

P07 02 空間をつくる

P09 03 ミュージアムを表現する

P11 04 空間をつかう

Project

P13 まちなか班

P37 垣生班

P53 桑原班

P73 パーソントリップ班

P83 その他連動企画

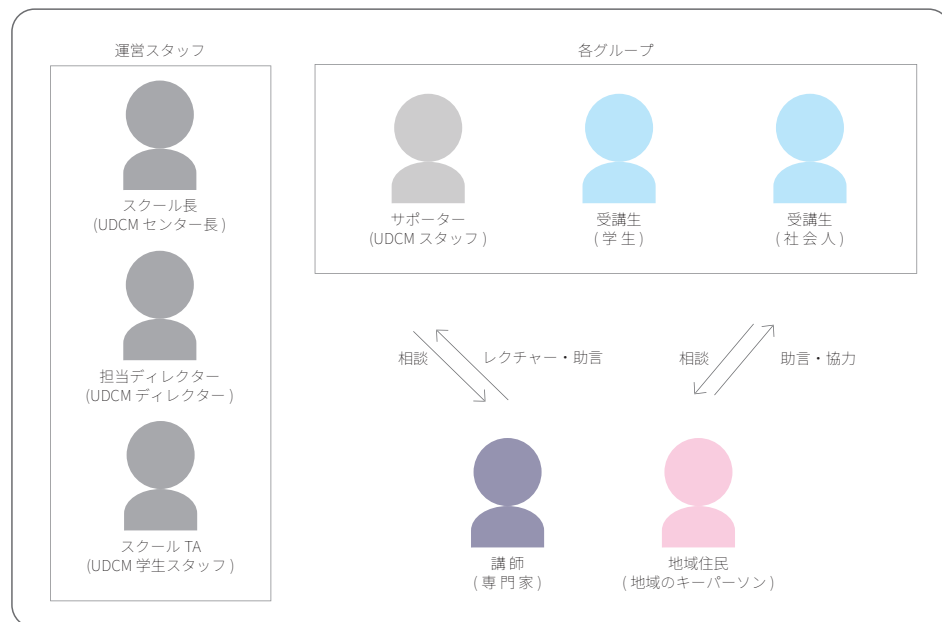


「アーバンデザイン・スマートシティスクール松山」とは

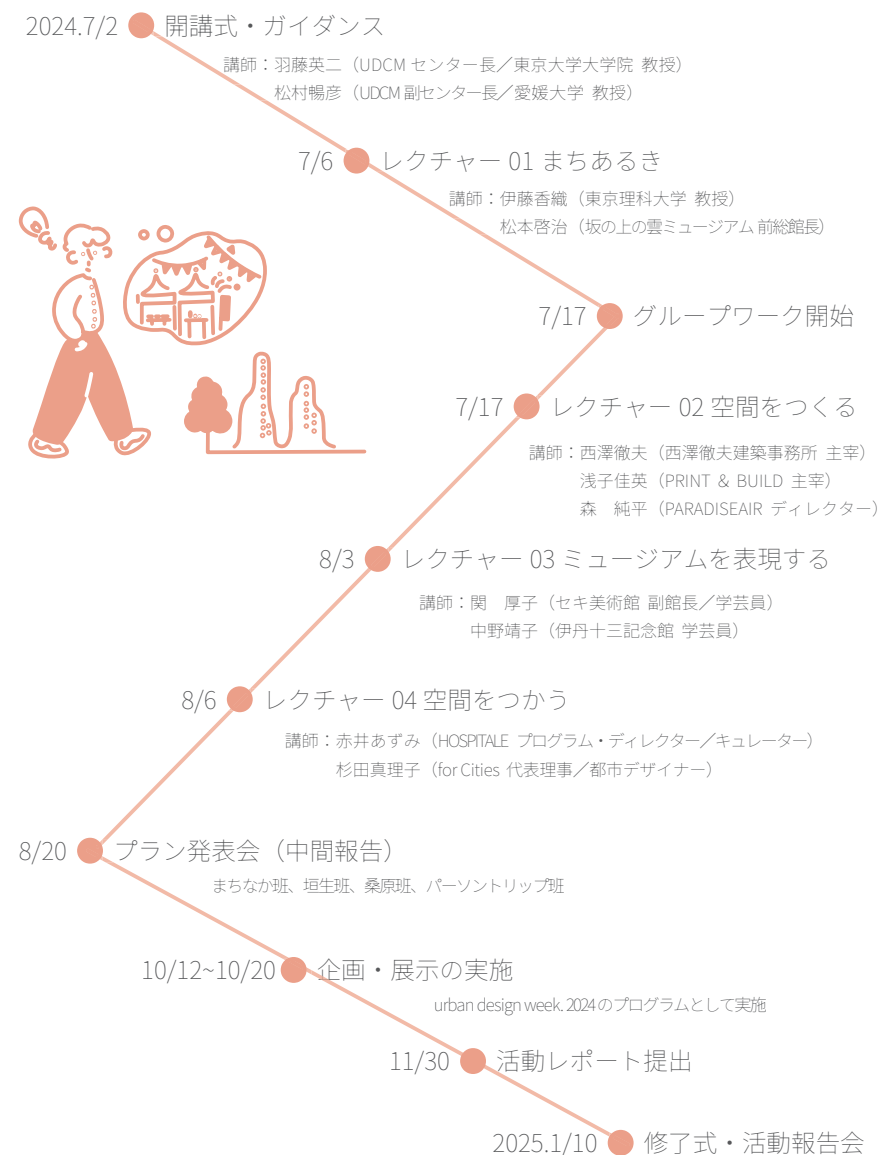
本プロジェクトは、公民学連携のまちづくり組織「松山アーバンデザインセンター」が主催する、まちの担い手育成プログラムの一つである。受講生は、地域資源を生かした新たな公共空間の構想と計画を实践することで、対象とする地域の歴史的成り立ちなどを踏まえた実践的なまちづくり活動を学ぶことができる。2024年度は『地域デザインミュージアムをつくる』をテーマに、28名の受講生が3グループ（まちなか班、垣生班、桑原班）に分かれ、オンラインとオフラインを織り交ぜたレクチャーを受講した後、対象となるエリアの地域形成史や地域デザインを踏まえた企画や展示を urban design week. 2024のプログラムとして行った。

各グループに UDCM ディレクターをサポートメンバーとして配置し、グループの受講生たちに助言や技術支援を行いながら、活動に伴走する役割を担った。また運営スタッフは、各グループに対して、協力者（大学教員などの専門家や地域のキーパーソン）の橋渡しやグループワークの進め方などの助言や補助を適宜行った。

運営体制



実施スケジュール（2024 年度／第 4 期）



開講式・ガイダンス

講師：羽藤英二（UDCM センター長／東京大学大学院 教授）
松村暢彦（UDCM 副センター長／愛媛大学 教授）

レクチャー

01 まちあるき

講師：伊藤香織（東京理科大学 教授／UDCM プロジェクトディレクター）
松本啓治（坂の上の雲ミュージアム 前総館長／UDCM プロジェクトディレクター）

02 空間をつくる

講師：西澤徹夫（西澤徹夫建築事務所 主宰）
浅子佳英（PRINT & BUILD 主宰）
森 純平（PARADISEAIR ディレクター）

03 ミュージアムを表現する

講師：関 厚子（セキ美術館副館長・学芸員／UDCM プロジェクトディレクター）
中野靖子（伊丹十三記念館 学芸員）

04 空間をつかう

講師：赤井あずみ（HOSPITALE プログラム・ディレクター／キュレーター）
杉田真理子（forCities 代表理事／都市デザイナー）

開講式・ガイダンス

講師：羽藤英二（UDCM センター長／東京大学大学院 教授）
松村暢彦（UDCM 副センター長／愛媛大学 教授）

アーバンデザイン・スマートシティスクール松山 2024 の開催にあたり、2024 年 7 月 2 日「開講式・ガイダンス」が愛媛大学にて実施された。

UDCM センター長であり、アーバンデザイン・スマートシティスクール松山 2024 のスクール長である羽藤英二教授の激励によりスクール活動は幕を開けた。地域デザインミュージアムをつくるためには、スクール内でチームをつくり、そのメンバーとともにまず地域資源を見つけ、展示することをすることになる。その拠点に来ていただいた地域の方と対話することで、さらに地域の魅力を体感し、松山の地域資源を磨いていくことが重要である。そのためには、チームワークが大切になるため、多種多様な経歴を持つメンバーの個性や感性を尊重し合ってほしい。まちづくりは一人ではできないため、みんなで実施するまちづくりや地域デザインの楽しさを学んでほしいと受講生にエールを送った。

続いて、UDCM 副センター長である松村暢彦教授からスクール活動で意識してほしいことについて話をいただいた。現在の松山は、松山市駅、JR松山駅、銀天街L字地区、榎町通りなどで再開発の話が挙がっているため、今後まちが大きく変わろうとしている。ここで失敗すると向こう何百年、松山の明るい未来は失われてしまう。大きく変わるまちを専門家によるハード整備だけで進めると、失敗することが目に見えるため、このまちに住む私たちがこれから変わるまちについて夢やワクワク感を一人称で語ってほしい。今回は夢を語るだけではなく、スクールを通して各々が持っているワクワク感を形にして、これからの松山の明るい未来のまちをみんなに見せてほしいと話をいただいた。



01 まちあるき

講師：伊藤香織（東京理科大学 教授／UDCM プロジェクトディレクター）

松本啓治（坂の上の雲ミュージアム 前総館長／UDCM プロジェクトディレクター）

アーバンデザイン・スマートシテスクール松山 2024 第1回レクチャー「まちあるき」が開催された。その地域を知るうえで、「まちあるき」は重要な手法の一つである。今回は、都市空間の解析及びデザインを専門とする伊藤香織氏と、松山の歴史を熟知している松本啓治氏を講師に迎えた。

最初にレクチャーいただいたのは、伊藤氏である。どのような視点でまちあるきを行うと、より有意義なものにできるかについて、伊藤氏自身が実際に行っている、まちあるきの視点を事例とともに紹介していただいた。

建物などの物体など見る対象だけに着目するのではなく、どこから見るのか、そして人の活動を含めた風景をどのように見るのかについて、意識して観察してみると良いと語る。また、建物や物体自体を観察するのではなく、なぜその場所にそのものがあるのか、都市との関係性も含めて考えることを、まちあるきのコツの一つとして伝授した。最後に、まちあるきをする中で気になったポイントを地図や写真を基に、その地域の歴史や都市計画的な背景を重ね合わせながら深堀をしていくと、より一層おもしろい発見につながると語った。



次にレクチャーいただいた松本啓治氏からは、松山市の歴史（都市計画的な背景）を紹介していただいた。松山城内町の成り立ちから、当時の時代的背景を踏まえて、松山の都市開発の歴史を紐解いていった。

現在に至るまでの松山市内の公共施設や銀行、百貨店などの大型施設の位置関係を照らし合わせていくと、松山の中心市街地の賑わいの移り変わりの様子が見えてくると当時の地図などを基に教えていただいた。松山の中心市街地は過去に松山空襲により被災しているため、復興が大きな転換点となり、現在の街並みが形成されている。まちなかを歩く際には、戦災復興により街並みが整備された場所の中にも、被災前の面影を残す箇所もあるため、そこをヒントに歴史を辿ることもおもしろいと、まちあるきの実践に向けたアドバイスをいただいた。



レクチャーが終了した後に、受講生たちは6人程度の任意のグループに分かれて、松山の中心市街地をまちあるきした。普段通学や通勤で見慣れている道にもかかわらず、意識して歩くことで、いつもと違う風景に見えることに気づいた受講生たちは、まちあるきに関して話題が尽きることはなかった。



まちあるきを終えた後は、各受講生が何について興味を持ち、どう感じたかなどをテーマにグループワークを実施した。自身が気になったところを話し合うことで、同じ時間に同じものを見て各々が感じたことや考えたことが異なることに気づき、互いのまちに対する見方と考え方について議論した。



02 空間をつくる

講師：西澤徹夫（西澤徹夫建築事務所 主宰）
浅子佳英（PRINT & BUILD 主宰）
森 純平（PARADISEAIR ディレクター）

アーバンデザイン・スマートシテスクール松山 2024 第2回レクチャー「空間をつくる」が開催された。第2回では、青森県八戸市にある八戸美術館の設計に従事されたお三方を講師に迎え、「建築（つくる）」の視点から、オンラインにてレクチャーが行われた。

最初にレクチャーいただいたのは、西澤徹夫建築事務所の西澤徹夫氏である。長野県の県立高校再編プロジェクトのコンペの時の話をしていただいた。学校の建築計画を行う際、学校のみでの論理で行うのではなく、街全体のモノ・コトとの関係を捉えて、外部的かつ長期的な視点を持ったうえで、計画することが重要な項目の一つだと教えていただいた。西澤氏は、このコンペにあたり、パソコン教室や演奏会、マルシェへの出展など、学校での授業や課外活動と地域とのつながりを紐解いていくことで、その高校に本当に必要な機能に気づくことができた。その結果、地域連携・交流施設の新設や、新たなイノベーションが生まれる各教室の配置を実現でき、動線の再編を提案できたと語った。

次にレクチャーいただいたのは、PRINT & BUILDの浅子佳英氏である。浅子氏からは、誰でも使用できるパブリックスペースの中で、最小の空間である「パブリックトイレ」の事例を紹介いただいた。今回紹介いただいたのは発展途上国ナイロビの事例である。学校やマーケット、集合住宅地など公共的な空間の様子と、それに対するパブリックトイレの位置付けについての解釈を実際の写真を基に紹介していただいた。「パブリックスペース」と一概に言われているが、日本で多様性のある公共空間を考える際には、今回取り上げたナイロビの人たちが含まれているのかなど、踏み込んだ議論をする余地がある。既成概念に捉われず、いつもと違う視点から考える必要があると浅子氏は語った。

最後は、PARADISEAIRの森純平氏にレクチャーをいただいた。森氏は、「一宿一芸」という松戸市の歴史的な文化を基に、その土地に興味があるアーティストを支援するアーティスト・イン・レジデンス事業を行っている。その事業に、年間に約50組の国内外のアーティストたちが参加し、まちのいたるところで活動をしている。アーティストたちの作品や活動に触れた地域の人々の感覚も伸びて、まち全体が柔軟になっていると紹介していただいた。最後に、ストレッチをする感覚で日頃から新たな事に取り組むと、まちに限らず、その人自身の筋（新しい感覚）も伸びて、柔軟になるので、プロジェクトや勝負をする際は大きな力が発揮できると教えていただいた。

すべてのレクチャーの後に羽藤センター長は、「『地域資源を掘り起こす』とは、地域が学びつくしたと思っているところを、もう一回学び直す必要がある。スクール生には、アーティストの捉え方や、都市的ではない前提条件は何なのかを掘り起こしていく力が、求められている」と語った。

後半は羽藤センター長がモデレーターを務め、クロストークを行った。レクチャーを振り返る中で、講師のお三方が空間をつくる際に心掛けていることや求める面白さについて質問をした。浅子氏は「流行に囚われず、建築のシンプルさという美しいもの、空間が使われたときに最も美しい建築のつくり方な何なのかを考え続けている」と語った。そして、森氏から「設計には正解がないため、自らが良いと思ったことにトライしてみることを大事にしている」と教えていただいた。最後に、西澤氏は「2人の話を聞いて、地域資源にどう光の当て方、語り方をするかで興味深さが変わると思った。新しいものをつくる前に、まずは地域資源を発見できるかどうか重要だと思う」とまとめた。

羽藤センター長は、クロストークの最後に、「ぜひ今日の3人のいろいろ講義からインスピレーションを得て、あまり前提条件を設けずにフィールドワークをして、展示や体験の表現を行ってほしい」と締めくくった。



03 ミュージアムを表現する

講師：関 厚子（セキ美術館副館長・学芸員／UDCM プロジェクトディレクター）

中野靖子（伊丹十三記念館学芸員）

アーバンデザイン・スマートシティスクール松山 2024 第3回レクチャー「ミュージアムを表現する」が開催された。第3回では、松山市内の美術館にて学芸員を務められているお二方を講師に迎え、“美術館”をテーマに愛媛県民文化会館の会議室にてレクチャーが行われた。

最初にレクチャーいただいたのは、セキ美術館の関厚子氏である。私立であるセキ美術館では季節を意識した展示を毎回実施している。今夏に行っている展示を例に、作品を展示する際の手法をいくつか教えていただいた。綿密に計算された展示の仕方は、来場者が作品をより魅力的に感じられるようなこだわりが散りばめられていた。その中には、キャプションにタイトルや作家名以外はあえて記載せず作品に集中いただくとともに、設置を作品の左側に統一することで、観覧中の動線を誘導するなど、可能な限りシンプルな構成の中で、来場者に展示に集中していただく工夫があった。

次にレクチャーいただいたのは、伊丹十三記念館の中野靖子氏である。伊丹十三記念館は、俳優、エッセイスト、映画監督として知られる伊丹十三氏に焦点を当てた美術館である。伊丹十三氏にまつわる様々な作品、空間が構成された美術館では、パネルや紙での静止物だけでなく、音声や映像等の動画、実際に動かすカラクリなど、来場者を楽しんでもらうための様々な工夫が施されていた。中野氏は、展示をする際の心得として、来場者全員に同じ共感をして同じように楽しんでもらうのではなく、訪れた人それぞれに「何かわかる」と思ってもらうことを意識していると語った。

羽藤センター長がモデレーターを務めたクロストークでは、「図録」というキーワードから、リーフレット等のデザインに対するこだわりを講師のお二方に教えていただいた。関氏は、制作側であるデザイナーに対して、想いやコンセプト、具体的な内容を正確に伝えられることが、非常に大切であると話した。また中野氏は、リーフレットの中身から展示に興味を引き、そこから展示内容に引き込むことができるようになるため細部にまでこだわっていると語った。

続いてのテーマは「ミュージアムを表現する」から、“伝える”という手法についてである。中野氏から“伝える”際の注意点として、誤字、脱字、文章の構成が重要であることが挙げられた。初歩的なことではあるが、誰しもが陥るミスをなくす工夫が必要である。毎年同じテーマで違う展示を実施しているセキ美術館において、“伝える”ためには、昨年までと違ったアイデアが必要となることから、旅行先でもいろいろな展覧会を訪れて新しいアイデアを得ていると関氏は語った。

羽藤センター長は、「表現をするということに日々研鑽されている講師のお二方から学んだ内容を各班の展示に活かしてほしい」と語った。

レクチャー終了後に、受講生たちはセキ美術館にて美術作品を観覧した。直前のレクチャーから学んだ知識や視点を持って、受講生が自ら体感することで、改めて表現することの奥深さを学んだ。



観覧後は、各班に分かれ、レクチャーを受けて考えたことや美術品を観覧した感想、それを踏まえて自分たちの班の活動にどう活かすかについて話し合った。グループワーク中は、講師のお二方にも各班の話し合いに参加していただき、受講生からのレクチャーや展示に対する質問に答えていただいたうえに、受講生たちが計画している企画・展示に対する助言までいただいた。レクチャーを受ける前まで地域資源をどのように表現するか悩んでいたため、受講生たちにとって非常に有意義な一日となった。



04 空間をつかう

講師：赤井あずみ（HOSPITALE プログラム・ディレクター／キュレーター）

杉田真理子（for Cities 代表理事／都市デザイナー）

アーバンデザイン・スマートシティスクール松山 2024 第4回レクチャー「空間をつかう」が開催された。第4回では、地域を巻き込んだ活動をされているお二方を講師に迎え、「アート×都市」をテーマにオンラインにてレクチャーが行われた。

最初に HOSPITALE の赤井あずみ氏にレクチャーをしていただいた。赤井氏は、アーティスト・イン・レジデンスをはじめとする、アートやアーティストとまちを繋ぐ活動として、まちなかの倉庫や、広場、建物を活用したアート展示を行っている。実際に展示場所として活用した倉庫では、オーナーが展示作品を気に入り、展示期間終了後に、自らギャラリーをオープンするなど、活動後に次の展開に繋がった事例も紹介いただいた。赤井氏は旧病院を拠点とした魅力的な活動も行っているため、他の旧病院の施設所有者から数件相談をいただいたと語った。病院が閉院してからの施設の中には産業廃棄物がたくさんあるため、容易に取り壊すことができず、病院の空き家活用困っている方がたくさんいるという現実気づいたと教えていただいた。



次にレクチャーいただいたのは、for Cities の杉田真理子氏である。杉田氏は、既存ものの見方を変え、組み替え、再編集して、新たな価値を創造することで、空間・都市への介入可能性を探ることを活動の理念として掲げている。「場」を編集し、使いこなすことの重要性を教えていただいた。京都にあるアートスタジオは、アーティスト・イン・レジデンスとして月に1回程度アーティストが滞在している。そのスタジオは、空き家をリノベーションする過程で、掃除や床貼りなどをワークショップ化するなど、それすらもプログラムとして地域や人を巻き込んだ活動をされている様子を紹介していただいた。最近では、地域の事業者の人たちと一般社団法人を立ち上げ、地域の小さなストレスを解消することをミッションに、空き家の活用等も行っていると語った。



後半は、羽藤センター長をモデレーターとして、クロストークが実施された。お二方は、「アート×都市」という意味で共通点があるものの、赤井氏は「アート」、杉田氏は「都市」からアプローチをしている中で、お互いの視点から、活動について語り合った。

話題は、現在の活動における失敗エピソードについてである。赤井氏は、やりたいことに対して、時間と労力が不足しており、まだ手つかずになってしまっている拠点があると語った。その中で、拠点としてのポテンシャルがある場所はたくさんあるにもかかわらず、限られた人しか使用されていない、または知られていない状況に陥りがちな中で、杉田氏が誰でも活用できる拠点を実現できていることが素晴らしいと話した。それに対し、杉田氏も同様に時間と労力が不足していることに加え、一人でできることの限界もあるので、複数人でやりたいことを分担して運営していると語った。また、一人あたりが自由に使える空間を増やすことで、一人ひとりがより豊かになれると考えていることが活動の根底にあることを教えていただいた。

杉田氏は、あらゆる活動について失敗とは捉えず、時代とともにアップデートしていくという表現をした。そのため、過去と現在で違う使われ方をしていたとしても、それは失敗ではなく、時代に合った使われ方をしていると捉えていると語った。それに対し、赤井氏も、ライフステージなどの変化はとても影響を受けるものであるため、俯瞰して活動を見てしていると語った。

杉田氏はベトナムに行った際、カフェを経営して早々に撤退する若者を多く見た。日本では失敗と捉えられる出来事であるが、ベトナムは発展途上のため、様々なチャレンジをしており、

その姿勢は素晴らしいものであると捉える。日本でも気軽に若者がチャレンジできるようになることが理想的であると想いを語った。赤井氏も、若者がチャレンジできる環境を整えることの重要性を同意した。

羽藤センター長は、最後に、今回の話の結論として、「失敗と思われても良いから、挑戦した方がいい」と受講生たちにエールを送った。



01 まちなか班

受講生 大山 真央
栗林 朗子
小山 真央
篠永 悠斗
進藤 小雪
弘中 琴絵
正岡 拓朗
森實 啓介
米倉 日菜詩

サポーター 竹内 仁美 (UDCM ディレクター)
山之内 崇 (UDCM プロジェクトディレクター)

TA 近藤 美咲 (UDCM 学生スタッフ)

開催日 10月12日(土)～14日(月)、18日(金)～20日(日)
開催場所 松山市大街道1丁目1-4
企画内容 展示：歴史展示、インタビュー展示、
参加型企画：マップ作り、フォトブース、珈琲提供、
アンケート、座談会、トークイベント
来場者数 のべ208名
効果検証 来場者アンケート、ヒアリング

program

みんなでえがく！銀未来

一 企画の背景と目的

松山市の「まちなか」での社会実験は、過去のスクール生によって JR 松山駅前、花園町通りなど何度か行なわれてきたが、今回は松山市の中心商店街・銀天街にある空きテナント（松島陶器横）を拠点として行うこととなった。

拠点のある場所は「L 字地区」と呼ばれ、かつては複合商業施設で賑わった中心地であったが、交通の利用が多い松山市駅、飲食店が多い大街道から離れた位置にあり、現在は通過点のようにになっている。また、まちなか班での意見交換やアンケート調査の結果、若者を中心に「利便性とテナント数の多さから、買い物は郊外ショッピングモールに行く」、「まちなかでカフェ以外にのんびり休憩できる場所がない」といった意見があがった。

「まちなかに居心地のいい空間を作りたい」、「歴史ある銀天街のことを知って欲しい」、「銀天街の未来と一緒に考えることで、愛着を持ってもらいたい」という思いから、まちなか班の大きなミッションは『まちなかに交流拠点を作り、銀天街に魅力を感じてもらおうこと』に設定し、「みんなでえがく！銀未来」のタ

イトルのもと、urban design week 期間の計6日間に渡り、展示やトークイベント等を行なった。



一 活動内容

今回の活動の拠点とした空きテナントは以前洋服屋の入っていた建物で、1階と2階を利用させていただいた。

1階では、展示（「銀天街の歴史を知ろう」「店主インタビュー」）、参加型企画（「銀未来マップを作ろう」「銀天街アーケードフォトブース」「まちなか珈琲屋台」）を行い、2階では、展示・参加型企画（「まちなかアンケート」）と、休憩場所として、人工芝を敷きクッションやハンモック、ティピーテント等を置きゆっくりとくつろげる空間「まちなか銀未来ラウンジ」を創出した。合わせて期間中に、座談会とトークイベントも開催した。



【1階 展示】

銀天街の歴史を知ろう

銀天街の過去と現在を比較することで、未来の銀天街がどうなってほしいか考えるきっかけになればと思い、3つのテーマで展示を行った。

■銀天街の映画館

戦前から戦後にかけて映画館が増加したまちなかだが、現在残っている映画館は1館しかないという背景から、戦前・戦後・現在と3つの時代で、小エピソードと共に映画館の変遷を展示した。



■昭和 58 年の銀天街周辺写真

松山市役所の方から昭和 58 年のフィルム写真をたくさん譲っていただき、お店の外観写真を横に繋げて当時の商店街を再現するような形で展示した。その下の段には現在の同じ位置の写真を撮影して展示し、今と約 40 年前のお店やアーケードの変化を見比べることができるようにした。昭和 58 年の地図と現在の地図も並べて展示した。

ほとんどのお店は現在はなくなり、昔はあったアーケードもなくなっているが、今も変わらず営業を続けている個人店も数店あり、銀天街の歴史の移り変わりを目で見えて感じることができる展示となった。

■銀天街のカフェ・喫茶店

現在のカフェと戦前のカフェの違いや、銀天街のどこにカフェ・喫茶店があったのかを印した地図などを展示した。戦前のカフェ・喫茶店の写真が載った資料と一緒に展示することで、当時の情景を



想像しやすいようにした。また、戦前のカフェ・喫茶店でよく笑えるような小エピソードを展示することで、歴史に興味のない方でも楽しめるようにした。

<成果>

多くの方が展示と一緒に置いていた資料などを興味津々に見ていた。特に、高齢者の方は写真や地図を見て懐かしんだり、よく通った場所だったなど思い出をお話したりしてくださった。また、若い人が銀天街のために動いてくれていることを知れて嬉しい、とおっしゃられる方もいた。今までシャッターが閉まっていたところに灯りが点いていると、普段通り過ぎるだけの人も、少し気になって歩くスピードを緩めたり、展示を見に入ってくださったりして、いつもとは違う銀天街の光景を作り出すことができたのではないと思う。

店主インタビュー

銀天街周辺でお店を経営されている方々にインタビューを実施し、お聞きしたお話とお店の情報をパネルにまとめて展示した。銀天街の歴史について調べようという話が上がった時、日頃から銀天街に携わっている方々のお話も聞いてみたいと思ったのがきっかけである。様々な年代の店主さんから見た銀天街を知りたいと思ったため、老舗のお店と最近新しくできたお店、両方の店主さんからお話を伺った。昔からあるお店には銀天街の歴史について、新しくできたお店には今の銀天街にどのような思いがあるのかを軸に、実際にお店を訪ねてインタビューをおこなった。両方のお店に共通して、未来の銀天街についても考えていただいた。

●インタビューにご協力いただいたお店

- ・新田薬局（1934年5月創業）
- ・BAKE STUDIO EMBER（2024年9月開店）
- ・Oyatsu Box（2024年7月開店）

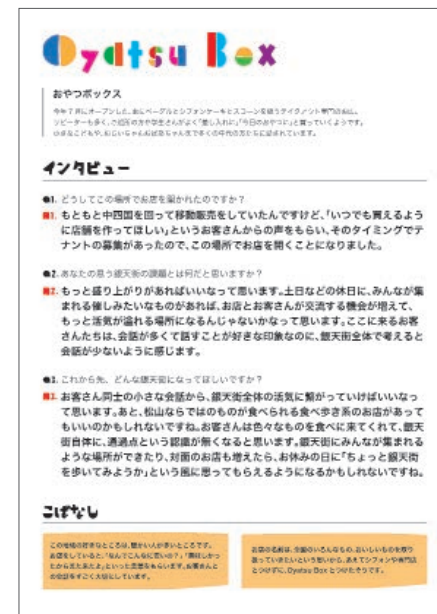
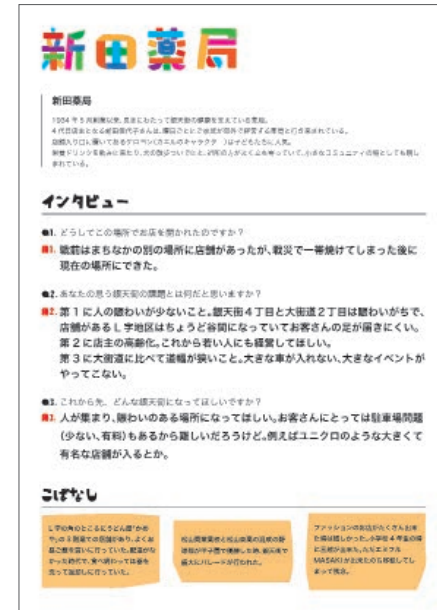


<成果>

新田薬局さんには、銀天街のお店の移り変わり、今の銀天街にはどのような課題があるのか、銀天街の昔話などを伺った。昔あったお店や、お店同士の交流の様子など、貴重なお話をたくさん伺うことができた。

新しくできたお店2店には、銀天街でお店を開いた理由、銀天街の好きなところやどのようなお店にしたいのかを教えていただいた。これからの銀天街に対し、どのお店も共通して「もっと人々が交流できる場所になって欲しい」という思いがあることが伝わってきた。

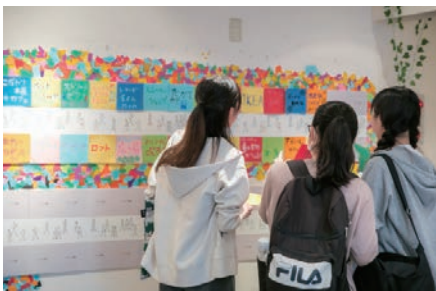
インタビューパネルを展示したことで、来館者の方も「このお店気になってました」「また行ってみたいです」等の言葉をいただき、お店のことを伝えることができた。



【1 階 参加型企画】

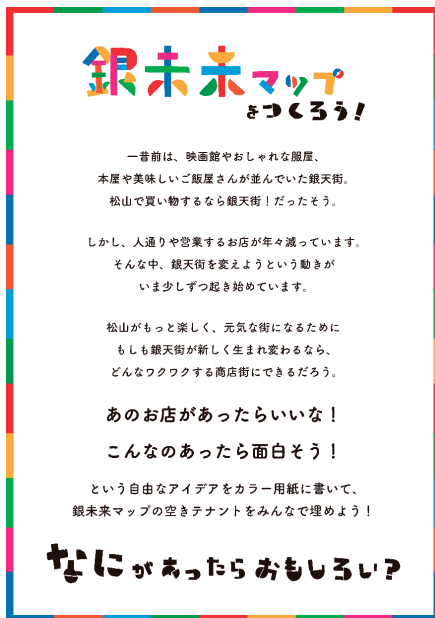
銀未来マップを作ろう

来場された方に将来の銀天街にあったらいいなと思うお店・場所を書いてもらうワークショップを行った。カラフルな画用紙にお店・場所を書いて、商店街に見立てたパネルの「テナント募集」の枠の中に自由に貼ってもらった。



＜成果＞

合計 64 枚書いていただき、子どもから大人まで幅広い層のまちなかに欲しい場所が合わさった未来の商店街マップが完成した。特に多かったのは、カフェなどを併設する書店や、公園や広場など、買い物で訪れた際、腰を落ち着かせて休める余白となる場所や環境を求めていると感じた。また、大型チェーン店もあれば、これまでにないような業種のお店などもあり、見ているだけで楽しいマップとなった。参加者の方も、悩みながら楽しんで書かれている姿が見られた。



■来場者の皆さんが銀天街にあって欲しいお店・場所（一部抜粋）
子ども服のお店、ストリートピアノ、ゆっくり過ごせる本屋さん、レコード屋、スニーカーショップ、駄菓子屋、芝生で子どもが走れる公園、焼き肉屋さん、ドーナツ専門店、大きなライブハウス、空きコマにゆっくりできるカフェ、まんが喫茶、アンティーク雑貨店、広場、すらいむやさん、ギャラリー兼画材屋さん、目新しい遊具のある公園、行ったら誰か居るイベント＆フリースペース、異文化交流できる場 など



銀天街アーケードフォトブース

外からも目立つモニュメントを作りたい、ということで、一つ昔の銀天街アーケードのモニュメントを製作した。スタイロや画用紙を用いて基礎を作り、銀天街の文字には赤いセロハンを貼り、レトロ感を出した。昔のアーケードが写る昭和 58 年の銀天街入り口の写真を大きく印刷して掲示し、その前にアーケードモ

ニュメントを設置し、間に入って写真を撮れるフォトブースを作った。

＜成果＞

懐かしいと言ってくださる方が多く、写真を撮ってくださる方も多くいらった。入り口に設置することで、インパクトのある展示となった。



まちなか珈琲屋台

訪れた人にのんびりして欲しい、また拠点周辺にはカフェや珈琲豆販売店が多数あり、周辺のお店を知ってもらいたいという思いから、各店の珈琲を提供する屋台を設置した。事前に珈琲豆を購入し、当日は受講生がドリップし、来場者に振る舞った。受け渡しブースには、店舗のことや珈琲豆、オーナーのこだわりを紹介するパネルも設置し、五感でまちなかの珈琲店を感じてもらえる機会を作った。

●珈琲豆の購入、協力店

- ・B.Factory
- ・珈琲店セラヴィ
- ・路地裏珈琲店

<成果>

珈琲をお渡しするタイミングで来場者の方に話しかけることで、来場者の方との交流の一つのツールとなった。協力依頼に行ったお店の店主さんも、期間中に拠点に来てくださったり活動を応援してください、お店の方とも交流することができた。外から見える位置に屋台を置いたことで、通行人の目に留まる仕掛けとなった。



【2階 展示・参加型企画】

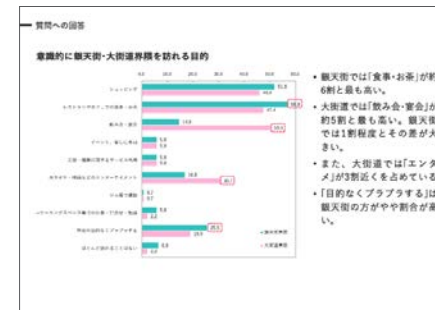
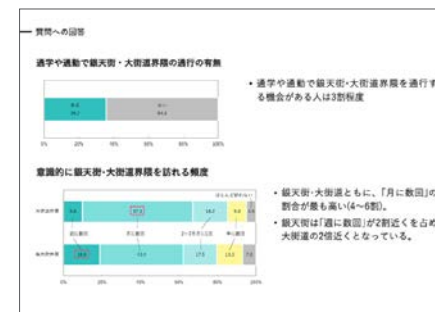
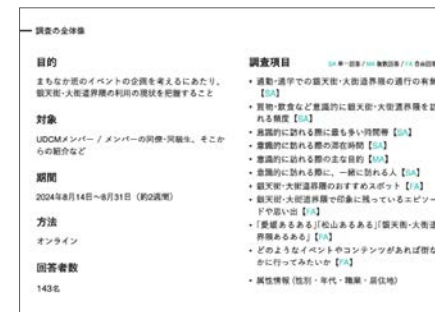
まちなかアンケート

事前にまちなかに関するアンケートをwebで実施し、そのアンケート結果のグラフと、記述式にしていた5つの質問の答えを、2階の休憩スペースに展示した。質問は、「銀天街・大街道のおすすめスポット」「銀天街・大街道のエピソード・思い出」「銀天街・大街道あるある」「愛媛・松山あるある」「どんなイベントがあればまちなかへ行ってみたいか」で、それぞれのパネルの色を分けて、簡単に見分けられるようにした。年代も記載し、どの世代の声なのか分かりやすくした。また、来場者にも質問の答えを考えてもらえるように、展示と同じ用紙を準備し、記入したら壁に貼れるようにした。



<成果>

期間中、合計46枚記入していただいた。アンケート結果や記入していただいたものを見ると、自分たちでも知らなかった松山のことを知ることができた。〇〇だった、今は無いが過去はこんな風な楽しみ方があった、など、特に銀天街の衰退を感じている人が多いことがわかった。しかし、銀天街の夏の風物詩の俳句パネルや、おすすめの店舗、土曜夜市など、今でもある楽しみ方に触れている人も多くいた。また、このようなイベントなどがあればまちなかに行ってみたというアンケートでは、子どもが楽しめる場所、ワークショップ、コラボカフェや俳句の鑑賞会など、様々な意見が寄せられた。今回集められた意見を、この場だけで終わりにしてしまうのは勿体ないため、この声をもっと広げていく活動が大切だと感じた。



■事前アンケートより（一部抜粋）

銀天街・太街道エピソード 銀天街のアーケードについてある小中学生の俳句の完成度の高さに驚いている 50代 銀未来	銀天街・太街道エピソード 子どもの頃、アサヒの焼肉うどんを食べてデザートに赤のれんのかき氷を食べた 30代 銀未来	銀天街・太街道おすすめスポット 三越前で野菜が売られている時がある 30代 銀未来	銀天街・太街道おすすめスポット 鍋焼きうどんアサヒさんがある通り 20代 銀未来
銀天街・太街道エピソード 昔は洋服屋さんが多かったのでよく服を買いに行っていた 40代 銀未来	銀天街・太街道エピソード シネマルナティックでレイトショーを見て静かな銀天街を歩いて帰った 20代 銀未来	銀天街・太街道おすすめスポット ギャラリーリブ・アート 30代 銀未来	銀天街・太街道おすすめスポット 三浦屋文具店 30代 銀未来
銀天街・太街道エピソード 野球拳踊りで大街道の中を練り歩いたこと 40代 銀未来	銀天街・太街道エピソード 中学時代、大街道銀天街に頻繁に行くことがイケてるやつの象徴 堂々と歩いた 40代 銀未来	銀天街・太街道おすすめスポット たぬきのモニュメント 30代 銀未来	銀天街・太街道おすすめスポット シネマルナティック 30代 銀未来
銀天街・太街道あるある とりあえず二番町交差点集合！ 30代 銀未来	銀天街・太街道あるある カラオケ店 激戦区 20代 銀未来	愛媛・松山あるある 愛媛マラソンのハンカチやたらと家にありがち 10代 銀未来	愛媛・松山あるある 道後温泉に入ったことが意外と無い 20代 銀未来
銀天街・太街道あるある とりあえず端から端まで歩いてみる 20代 銀未来	銀天街・太街道あるある 歩けば知り合いに出くわす 10代 銀未来	愛媛・松山あるある 小学校の授業の一環でポンジュース工場に行く 10代 銀未来	愛媛・松山あるある 県外から来た人に2種類の鯛めしを自慢する 50代 銀未来
銀天街・太街道あるある 銀天街裏路地は割とお店がある 30代 銀未来	銀天街・太街道あるある 「まち」に行くと言う 60代 銀未来	愛媛・松山あるある 香典返しがタオル 30代 銀未来	愛媛・松山あるある 給食でみかんぱんやみかんごはんが出る 10代 銀未来
こんなイベントがあれば… ラーメン横丁やうどん横丁など 50代 銀未来	こんなイベントがあれば… 路上パフォーマンスや路上ライブなどなど 20代 銀未来		
こんなイベントがあれば… 私たちが知らない銀天街や大街道を知れるトークショー 40代 銀未来	こんなイベントがあれば… パーソナルカラーや骨格診断など、気軽に尋ねられるイベント 30代 銀未来		
こんなイベントがあれば… ブックマーケット お酒と、つまみと、本 40代 銀未来	こんなイベントがあれば… 人を呼べる 有名人 60代 銀未来		

■期間中記入していただいた内容（一部抜粋）

銀天街・大街道エピソード	子どもが小さいとき毎週のように「てくるん」にお世話になりました ガチャ王国で欲しいキャラクターがでた A-ONE、レコード屋さんが無くなって寂しい ドトール(銀天街店)でデートした思い出がある ディズニーのパレードが楽しかった 大食い選手権
銀天街・大街道おすすめスポット	おるがん あんから庵 Crape café Coco Stella フライングスコッツマン mori cafe まつやま軌立豚骨ラーメン一統 東京油屋本店 Good Time Stand enowa さかい珈琲
愛媛・松山あるある	県外から来た方に「だいかいどう」と言われると、訂正のタイミングに気をつかう 良いはおいがいろんなところからしてくるから、ごはんどこ行こうか迷っちゃう 自転車禁止お姉さんの存在 市電に乗らずただおしゃべりしながら歩く(タダ) アマンダコーヒーは愛媛だけ カラオケのお店多め ひととおり買い物終わったら、からあげ買ってペンチでだべりがち 夜市で八十金のからあげ買う
こんなイベントがあれば…	演奏会 ダンスショー ハロウィンイベント コスプレイベント お魚釣り大会(ブリ、サワラ) ワークショップ体験 画検りレー大会 屋台やキッチンカーが集まるイベント 街の歴史を物語にした回遊エンタメ型まち歩き ガイドブック製作&実演 まちかどジャズフェス@空き店舗 アートイベント METALイベント 子ども(赤ちゃん)が遊べる施設 ドローンレース 松山中心部の歴史を学べる時代劇 モルック大会 色々な動物と触れ合える 犬いっぱい大会

【参加型企画】

銀天街思い出座談会

10月13日(日)18:30～20:00

トークゲスト：渡部 謙一さん（元エヒメカメラ店主）、新田 佳代子さん（新田薬局店主）

参加者：19人

昔からの銀天街を良く知る方々と展示物を見ながら、昔から現在、そして未来の銀天街について語り合う企画を行った。まちあるき中に出会った渡部さん（以前銀天街にあったエヒメカメラ店主）と長年銀天街で営まれている新田薬局の新田さんをお迎えして座談会を開催した。



<成果>

知らなかった銀天街の昔のお話（当時の町内会やお店同士の繋がり、戦時中に体験されたことなど）や、現在の銀天街に対して思っていることなどをお聞きすることができ、貴重な時間を過ごすことができた。「昔は豊かだった」という言葉が印象的で、今の銀天街でお店をすることは難しいと出店者側の意見を聞く事もできた（今はモノを売る時代ではなく、コトを売る時代）

参加者からも様々な質問が出て、お二人を中心に、交流の場を持つことができた。参加者に昔の活発な銀天街の様子をお伝えすることができた。



銀未来トークイベント

10月20日(日)17:00～19:00

トークゲスト：越智 政尚さん（「本の轍」主宰）、山之内 圭太さん（「DD4D」代表）

参加者：17人

クロージング企画として、『まちなかにカルチャースポットをつくる！一松山まちなかの昔・今・未来一』をテーマにトークイベントを開催した。まちなかでお店を構え、モノとコトを提供している店主お二人をゲストに迎え、それぞれのお仕事について（お店や活動の紹介、開業するにあたって松山のまちなかを選んだ理由）、松山中央商店街のこれから（商店街の思い出、課題）、松山のカルチャー創造についてお話を伺った。

<成果>

革新的なビジネスモデルで新たなカルチャーを創造されているお二人ならではの視点で、松山の過去、現在、未来について率直な考えを伺うことができた。



大学生に向けてのアドバイスや、「松山で好きなお店はどこですか？」など一般の参加者の方からの質問にも答えていただき、盛況なイベントとなった。改めて、お店や場所の持つ可能性を感じることができた良い締めくくりの時間となった。



一 成果

まちなか班は、休憩スペースづくりと8つのコンテンツを行い、実施期間6日間で、延べ208名の方にご来場いただいた。

1階では、銀天街の過去と現在を分かりやすく伝え、銀天街の未来について一緒に考えてもらう機会を作ることを目指し、見ごたえと気づきのある空間を生み出すことができた。また、「銀天街アーケードフォトブース」、「まちなか珈琲屋台」を設置したことで、小さくではあるがまちなかにアトラクションを作り、「銀天街思い出座談会」と「銀未来トークイベント」では、ゲストの方々のお話を聞きし交流する場を作ることができた。

2階では、小さな子どもはハンモックやテントで遊んだり、高校生や若い世代は珈琲を飲みながらおしゃべりしたりと、多くの方が長時間くつろぐ姿が見られた。2階は大きな窓があり、銀天街の

様子を眺めながらゆっくりでき、解放感のある雰囲気が良かったのではないかと考える。

6日間、親子からご高齢の方まで幅広い方々にお越しいただき、メンバーが積極的に声かけをすることで、それぞれの銀天街の思い出や、銀天街の未来に求めるものを直接聞かせていただくことができた。場所柄、県外からの旅行者の方にも数組ご来場いただき、他都市と比較した松山の良いところやまちを歩いてみての感想もお聞きした。メンバー自身も、来場者の方と一緒に話すことで、より松山のまちなかの未来について考えを深めることができる良い機会となった。

これらのことから、ミッションとして掲げていた『まちなかに交流拠点を作り、銀天街に魅力を感じてもらうこと』は概ね達成できたと考える。



【来場者データ】

来場者をカウントし、時間帯別年齢層の集計をおこなった。

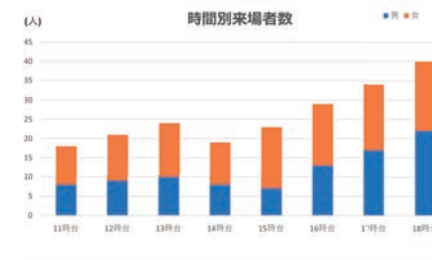
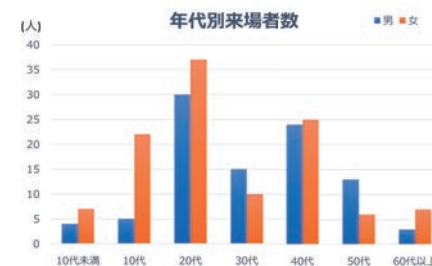
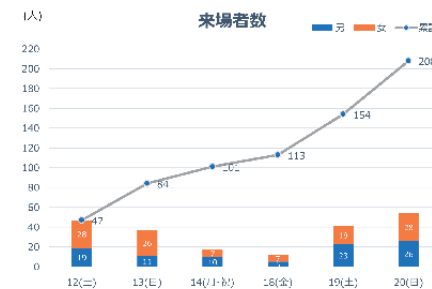
◆来場者数 208名
(男性 94名、女性 114名)

・来場者数が最も多かったのは、最終日20日(日)で54人。

・年代別にみると、20代が一番多く、次いで40代となった。日で比べると、座談会やトークイベント、茶話会のあった日は20代が多くなり、それ以外の日は40代が多いという結果となった。

高校生、大学生は女性グループで来られた方が多く、10,20代は女性の割合が多くなった。

・来場者数の多い時間帯は日によって異なったが、座談会が18:30、トークイベントが17:00から開催だったこともあり、6日間で集計すると18時台が最も多い結果となった。



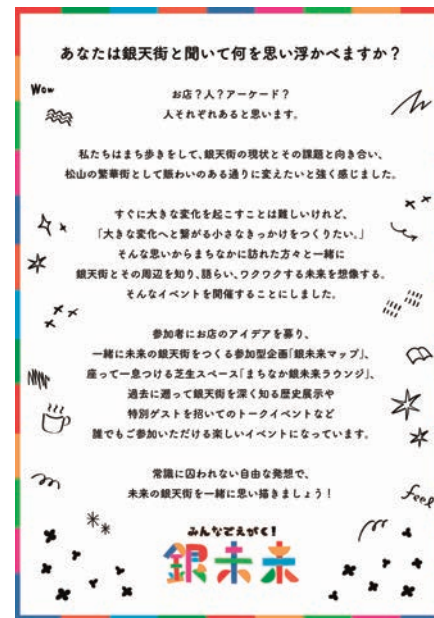
一 今後の課題と展望

今回、銀天街の空きテナントを拠点としたことで、松山の中心市街地は職場や学校が多いため人が集まりやすいのに対して、人が座って休んだり、多様な活動を行ったりする場が少ないという課題が見つかった。拠点の前の通りも平日休日ともに人通りは多く、作業やイベントをしていると外観を見てくださる方は一定数いたが、立ち止まって入ってきてもらう、目的地として来てもらうことはなかなかハードルが高かった。

また、銀天街周辺のお店にお話をお聞きしたところ、昔から銀天街で店を営んでいる方々と最近新しく営みを始めた

方々との、銀天街に対しての認識や目指すものが少し異なるようにも感じた。そしてそれらを共有する場所や交流する機会があまりないため、銀天街でのお店同士のつながりも希薄になっていることが分かった。町の人だけでなくお店の人も、どのような銀天街にしていきたいのかを考える機会や意見の共有をできる場があれば、何か新しい価値観を銀天街にもたらしることができるのではないかなと思う。さらに、通過する人たちの賑わいを生み出すためにも、お店同士、お客さん同士、お客さんとお店同士の関わりを今よりももっと増やすことができればと感じた。銀天街自体、お店の入れ替わりもあり、長く交流を続けることは難しいかもしれないが、定期的に銀天街全体でのイベントや交流できる場を開くなどして、少しでも人が集まるきっかけを作っていくことが重要だと考える。

合わせて、銀天街だけでなくその周辺も賑わうことで、エリアとして魅力的な場所になるのではないかと感じた。参加者の皆さんに書いていただいた「銀未来マップ」や「まちなかアンケート」にあるような斬新なアイデアが、まちなかのあちらこちらで実現すると、より面白いエリアになると思う。また今回の企画の



一 ご協力いただいた方々

ように、期間限定のショップ、ギャラリー等としての利用ができる、無償もしくは安価で使える場所が複数あれば、継続的に賑わいが作れるのではないかと考えた。まちなかにしか作れない、人が集い憩える場所を作り出せば、もっと多様な活動が生まれる楽しいまちになると考える。また、目的地として来てもらうためには、事前に幅広い人に知ってもらえるようなPR、高いデザイン性やSNSの活用等の重要性も強く感じた。

今後もそれぞれの関わり方で、まちなかや銀天街の魅力を見つけ、このエリアが持つ特性を最大限に活かせる、面白い仕掛けを展開していければと思う。

- プログラム実施場所の提供
 - ・ 小川 憲次さま
- インタビュー協力店
 - ・ 新田薬局
 - ・ BAKE STUDIO EMBER
 - ・ Oyatsu Box
- 珈琲豆の購入、協力店
 - ・ B.Factory
 - ・ 珈琲店セラヴィ
 - ・ 路地裏珈琲店
- トークゲスト
 - ・ 渡部 謙一さま
 - ・ 新田 佳代子さま
 - ・ 越智 政尚さま
 - ・ 山之内 圭太さま

大山 真央

活動の中で出たアイデアをまとめ、実際に形にすることはとても大変でしたが、皆さんと一緒に素敵な展示、空間を作ることができて良かったです。また、魅力などを再発見し、改めて自分はこの街が好きだと気がつきました。

今回の活動で行ってみたいお店をたくさん見つけたのでこれから友達と「制覇」を目指して頑張ります!! 皆さん本当にありがとうございました!!!!

栗林 朗子

何に絞って展示するかまとめきれないほどのデータの量に、銀天街の長い歴史と、変化の速さを実感しました。普段通過している場所に滞在し、辺りを見つめてみる。お店の人や街の人と会話を重ねて顔馴染みになって行く。通勤で行き来していたまちなかの景色が、より鮮やかになっていきました。あれから珈琲のハンドドリップにハマっています。

小山 真央

今回の活動で銀天街は人を引き付ける、リラックスができる魅力がある商店街だと気づくことができました。私も最初は大街道には行くものの銀天街には行かず、自宅に帰っていました。その理由として買い物をする分には大街道だけで完結すると思っていたからです。しかし、この銀天街で活動していくうちに地元民の温もりや普段とはまた違ったお店に立ち入るようになるなど、去年からは想像もしなかった刺激を受けることができました。また、活動も楽しく良い経験が出来ました。

篠永 悠斗

私は、元々松山に住んでいた訳ではなく、大学進学につれ松山に来たので松山のことにについて沢山知りたくてこの活動に参加した。やはり銀天街は昔に比べ活気を失っているということで難しい部分もあったが、私が話した人はみんな温かかったし、この活動をきっかけにコーヒーマイルを買ったり豆を買ったり、趣味を増やすことが出来た。色々な人と協力したりお話を聞いて自分自身の成長へ繋げることもできたと思うので参加して良かったと思えた。

進藤 小雪

様々な人の視点から、未来の銀天街について話を聞くことができました。どの年代の方の意見にも共通していたのは、もっと活気のある場所になってほしいという思いがあったことです。また、松山はお話をするのが好きな人が多いことも聞いて、少しでも話すきっかけになるような場所ができればいいなと思いました。

弘中 琴絵

この活動を通じて、まちなかの魅力や歴史について深く学ぶことができました。普段社会人の方と話す機会がないので、新たな視点を得ることができていい経験になったと思います。アーバンウィークには様々な方のお話を聞くことができ、まちなかに対する思いや課題などを知ることができました。この活動に参加できて良かったです。ありがとうございました。



正岡 拓朗

まず松山の街の未来について真剣に考える人達がこんなにいる事に驚いたのと同時に、素晴らしい機会に参加させてもらったことに感謝したいと思います。本企画では、銀天街の課題を見つけるところから始まり、どうすれば人々が魅力を感じる場所にできるかを突き詰めて意見交換をしました。学生から社会人まで様々な視点での議論はとても意義ある時間となりました。また展示の中で歴史を知り、訪れた人達にアンケートを取ることで、人々が求めるものは一体何なのかを見つけ、これから未来を作っていくヒントを貰いました。この経験が松山をより素敵な街へと変える第一歩だったと思うよう、熱い情熱と信念をもって今後の活動に役立てていきたいと思っています。

森實 啓介

僕は大学生になって松山に来て、地元はもっと田舎なのでとても都会だなと感じていました。ですが、半年ほど経ち、少しずつ街中に足りないものを感じてきました。それは活気です。大街道は夜でも人がいて賑わっていますが、銀天街は人がほとんど通らず店もほとんどしていませんでした。ですが今回の活動を通して少しでも銀天街の魅力をたくさんの人に知ってもらうことができ、嬉しかったです。活動を行うまでの日々もとても充実感があり、とても楽しかったです。来年も参加したいと思いました。

米倉 日菜詩

高齢者の方と一緒にお話をさせていただいた中で、若い人が銀天街のことを考えてくれているのが嬉しいなどと言って頂き、私もイベントをやって良かったなと思いました。元々、自分自身もあまり銀天街に興味がなく、いつも通り過ぎるだけでしたが、このイベントを通して銀天街の魅力を知ることができて、楽しかったです。また、まちづくりの難しさを再認識することができ、もっとまちづくりの手段や方法について学びたいと思いました。



近藤 美咲（TA）

最初からなかなか決まりませんでしたが、話し合いを重ねるうちに徐々にチームワークが発揮されました！当日では来場者へ声をかける、外観を華やかにするなど積極的なみなさんの動きからより良い企画展示にしたいという思いが伝わりました。このメンバーだからこそ、成し遂げることができたのではないのでしょうか。今回の経験が松山のこれからについて考える、新しい自身の価値観が生まれるきっかけになれば嬉しいです。

山之内 崇（サポーター）

まちなか班の皆さん、活動お疲れさまでした。空洞化が進む商店街をフィールドに、どうすれば街に人が来たいと思ってもらえるか？という難しいテーマでしたね。それゆえ、当初は方向性がなかなか定まらず、ウィークに間に合うかとハラハラしましたが、終盤からギアが入り、チームワークも発揮して、最後は座談会・トークイベントまで成し遂げました！素晴らしい！この経験を生かし、松山の活性化に向けて引き続き頑張っていきましょう。

竹内 仁美（サポーター）

銀天街の課題やまちなかにあって欲しいもの、それをどうしたら形にできるのか…まちなか班の皆さんと一緒に、考え話し作る日々を過ごし、様々なコンテンツと想いの詰まった「銀未来」空間を作り上げることができました。最後まで諦めずに作り上げたこと、来場者やまちの方とお話したこと、皆さんにとっても何か気づきのある楽しい時間だったなら嬉しく思います。私個人としても、まちなかのフリースペースとしてのもぶる라운ジの役割や、これから出来ることについても、改めて考える良い機会になりました。ありがとうございました！



02 垣生班

受講生 池本 悠華
大政 璃奈
越智 さくら
近藤 翔太郎
谷村 凜久
西原 歩佳
林 夏衣
古崎 杏里
星加 有希奈

サポーター 尾形 愛実 (UDCM ディレクター)
矢野 ひなの (UDCM アシスタントディレクター)

TA 山本 あい (UDCM 学生スタッフ)

開催日 10月12日(土)～14日(月)、19日(土)～21日(月)、
27日(土)～29日(月)、
11月2日(土)～4日(月)、9日(土)～10日(日)

開催場所 松山市西垣生町 540 サワかふえ

企画内容 交流拠点づくり

常設展示：写真展・マップ、模型、看板、伊予かすり etc...

ワークショップ：たこ飯づくり、伊予かすりリメイク ect...

来場者数 のべ〇〇名

効果検証 来場者アンケート、ヒアリング

program

来て！見て！食べて！OCT - H A B U

一 企画の背景と目的

垣生地区は、松山市の西南端に位置し、北に松山空港、南は重信川に面している。実は、昨年度も垣生地区で活動しており、その活動以降、地元開催の文化祭への出展など、地元とのつながりが色濃く続いているエリアでもある。このご縁をより深いものにするのと同時に、まだまだ眠る垣生の地域資源を発掘するため、2年連続の「垣生班」の活動がはじまった。

今年度は、「地域交流拠点づくり」をテーマに、地元住民が憩い交流できる居場所づくりを行うとともに、地元の魅力的なコンテンツを展示することで、垣生地区の魅力を再認識してもらえるような空間づくりを心掛けた。そのため今回は、約1カ月間の週末に拠点運営を行った。



一 活動内容

垣生班では、地域デザインミュージアムの核となる拠点を中心に、地域の魅力を伝えるためのさまざまな「常設展示」や「体験型のワークショップ」などさまざまなコンテンツを実施した。

【拠点の空間づくり】

今回の活動の拠点として、垣生で古民家カフェを営業されている「サワかふえ」さんをお借りした。「サワかふえ」さんは、平日はカフェを営業、休日はイベントスペースとして貸出を行っている。

垣生班として、イベントスペースとして貸出を行っている週末にお借りし、趣のある日本家屋の佇まいの建物に、垣生にまつわる多種多様な展示を行った。また、今回は誰でも憩える空間づくりを目指していたため、小上がりの畳を設置し、気軽に腰かけたり、荷物を置いてゆったりできるような工夫を行った。

なお、ご店主のご厚意で一部の展示は、カフェ営業中も展示させていただいたため、より多くの方に御覧いただいた。

【常設の展示】

あなたと結ぶ写真展・マップ

垣生の魅力を再認識し、垣生により愛着を持ってもらえればと思い、垣生の魅力的が詰まった写真展と、マップ展示「みんなでつくろうハブマップ」を行った。

写真展では、何気ない風景のなかにある垣生の魅力を感じてもらうために、メンバーがまちあるきで見つけた垣生の風景を展示した。展示は拠点にある格子状のガラス戸を活用し、昼、夕方、夜と時間とともに変化する垣生の風景を表現した。写真がどの場所か当てるクイズで盛り上がっていたのが印象的だった。

もう一つは、マップ展示である。垣生の好きな場所やおすすめのお店を自由に書き込むことができる参加型の展示を

行った。同時に、メンバーが見つけたお店をPOPでも紹介した。この展示により、来場者同士の新たなつながりが生まれるとともに、垣生の魅力がたくさん詰まったマップが完成した。



伝えていきたいいろ・もよう

垣生の魅力的な資源・文化として欠かさないのが「伊予かすり」である。「緋(かすり)」とは、先に染められた糸を織って紋様を表された織物である。

今回の展示では、当時織元さんが最後に仕立てた、松山の市花・椿の紋様があしらわれた着物をお借りした。実は、お借りした着物には片袖がない。それは、織元さんの元に、何かカタチに残ればと、バッグにリメイクしてお渡したそうだ。

そんな、伊予かすりが紡いできた想いを、これからもたくさん伝えていきたい。



ただの名前じゃありません

今回、地域の将来を担う若い世代の方々からアイデアをもらうことで、より一層の地域との結びつきを深められればと、地元の小・中学生へのアプローチも行った。その取り組みの一つとして、垣生中学校の生徒を対象に、交流拠点の名前を募集し、約50の魅力的な提案の中から、「ハブシル」という名称を採用した。この名称は拠点の正面に展示されており、交流拠点のシンボルとして存在感を示してくれ、拠点と地域との結びつきを象徴する大切な第一歩となった。



【ワークショップ】

たこ飯づくりワークショップ

『美味しい』という言葉から始まる会話で、世代間を超えた繋がりをつくりたい。そんな想いから「食」に関する企画が立ち上がった。今回取り上げたのは「たこ飯」である。かつて垣生ではたこ漁が盛んに行われ、家庭の味として地域に根付いていた「たこ飯」であるが、近年のたこ漁師の減少や不漁などにより、「たこ飯」は家庭の味から遠のいていった。

そこで今回、垣生の食文化を知ってもらうとともに、世代間で交流するきっかけになればと、垣生小学校の生徒とその

保護者の方、9組計20名に参加いただき「たこ飯づくりワークショップ」を実施した。調理指導は、西垣生西集会所のふれあい・いきいきサロンに参加されている6名の方にご協力いただいた。当日は、たこ飯とたこの酢の物づくりを行い、子どもたちは、たこの触感に驚いたり、一生懸命切ったりと、見て触れて楽しんでいた。

炊きあがりを待っている間に交流拠点へ移動し、最後は、展示を楽しみつつ全員で食卓を囲み交流を深めた。



伊予かすりリメイクワークショップ

今回伊予かすりの着物も展示をお借りした際にお話を伺ったところ、伊予かすりの着物を、バックや洋服、日傘など、身近なものにリメイクされていた。その中でもお花へのリメイクされた小物が可愛らしく、今回の会場でワークショップとして実施できないか相談したところ快諾いただいた。

当日は、15名の子どもから大人まで楽しんで作ることができ、特に子どもたちの笑顔をあふれる光景を、講師の先生も嬉しそうに語っていた。



グリーンスローモビリティ体験・夕日ツアー

今回の交流拠点づくりと連動して、新しい交通手段の提案として、グリーンスローモビリティの実証実験を行った。垣生のまちを、地元小学生に車体にお絵描きをしてもらった車体で運行した。

また、期間中に2回「夕日ツアー」開催した。グリスロで街並みを楽しみながら重信川河口まで移動し、たこ飯おにぎりを食べながら夕日を眺めた。小学生から高齢者まで、幅広い世代に参加いただいた。夕日を眺めながらゆっくりタコ飯を食べる時間は、参加者全員が垣生の良さを改めて感じる時間になった。



【広報活動】

プロジェクト名「OCT-HABU」

今回のプロジェクトにタイトルを付けるにあたり、自分たちの活動をイメージでき、垣生を連想される言葉をチョイスした結果、「OCT-HABU」を採用した。

この言葉には、垣生の名産「Octopus (たこ)」や開催月の「October (10月)」と、「垣生 (HABU)」の「中心となる拠点 (hub)」という意味が込められている。



広報資料

今回のイベントを周知するためにチラシを3枚作成した。

まずは、全体の活動をお知らせするチラシである。まちあるきをした際、夕日が沈む穏やかな海と、独特な風合いと藍の強さを持つ伊予絁が心に残り、青色を基調にデザイン(写真左)と、共通して「たこ」のイラストをキーポイントとした(写真中央)。少しでも多くの人に活動を知ってもらうきっかけとなり、イベントを彩るものになって欲しいと思い作成した。

また、垣生小学校に配布する用ため、たこ飯づくりワークショップの参加募集チラシも作成した。たこ飯の美味しさやみんなで作って食べる楽しさが伝わるように想いを込めた(写真右)。



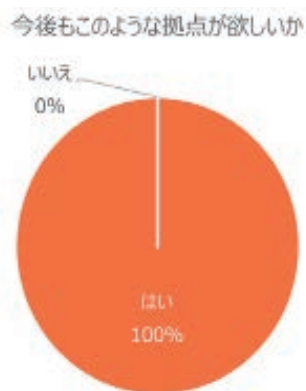
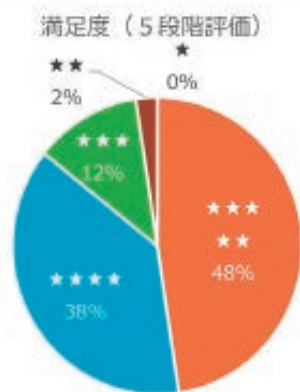
一 成果

今回の活動では主に写真や模型の展示と、たこ飯づくりをはじめとするワークショップの2つの活動を行った。垣生の写真・マップや模型の展示は、来場者から「垣生に住んで50年余りになります却不知道垣生を再発見できた」などの感想をいただき、地元の方も垣生の魅力再発見できる展示となった。

たこ飯づくりは、「地元で有名なたこ飯が作れることに興味がありました。子どもが自分で名人に教わりながら楽しそうに参加していたのが印象的でした。」などの感想をいただき、郷土料理を作る体験と同時に、地域の人同士がかかわることのできる活動になった。

また、拠点について地域の方はどのように思っているのかを知る目的で、拠点に来てくださった方に、今後もこのような拠点が欲しいかというアンケートを取ったところ、質問に答えてくださった方全員に今後も欲しいという回答をいただいた。拠点が欲しい理由として「室内で子供が自由に遊べるスペースがないため」「魅力を教えてもらう場所がどんどん少なくなっていった自分たちの住む地域の魅力を忘れていっている気がするから」（中・高生）「お年寄りも元気で様々

な知恵と垣生のお話もたくさん知っているので気軽に交流できていいと思った」という声があり、子供の遊び場や地域の人の世代間での交流の場、垣生の地域資源や魅力を次の世代に伝えていく場として拠点は地域に必要なものであると再確認できた。



一 今後の課題と展望

今回の課題として、広報面の強化が挙げられる。特に、垣生地区にお住まいの方々の一部の方は知っているが、まだまだ知らない方が多い状態だった。実際、来場者の方から、「せっかくの魅力ある活動なのに、ほとんどの人が知らない。もったいない」という声を複数いただいた。垣生地区では、基本人づてに伝わるらしく、チラシだけでなく、より多くの方に直接発信いただく方法も重要であるとアドバイスいただいた。

同様に、垣生地区以外に住んでいる方への発信も必要である。SNSやウェブ

サイトなどのデジタルメディアを活用した情報発信の強化や、地域資源を活かした体験型観光プログラムの開発も効果的であると考ええる。

また、成果の中でも声があったが、垣生地区での交流拠点の需要は多いにあると言える。今回は1カ月間と短い期間での実施となったため、効果としてはさほど出ているとは言えないかもしれないが、より長期での実験を行うことで、地域に根付いた交流拠点となれるのではないかと考える。

一 ご協力いただいた方々

プログラム実施場所の提供

サワかふえ 石田さま

展示物等の提供

鷹尾さま（伊予かすりのお着物 etc...）
 仙波さま（伊予かすりのお着物）
 西村さま（昨年度垣生班展示品の一部）
 重藤商店 重藤さま（畳）
 重松さま・浅海さま（みかん箱）
 畑寺児童館さま（レゴ・ブロック）
 BEMAC さま（グリーンスローモビリティ）
 第一交通さま（グリーンスローモビリティ）

ワークショップへのご協力

西垣生西集会所 ふれあい・いきいきサロン
 相原さま、大原さま、小西さま、
 白石さま、中矢さま、中矢さま
 伊予かすりリメイク花づくり 鷹尾さま
 信子おばさんの伊予弁紙芝居 永井さま

情報提供・開催へのご協力

垣生公民館さま
 垣生小学校の先生・全校生徒のみなさま
 垣生中学校の先生・全校生徒のみなさま
 そして、垣生地区にお住まいのみなさま

- 拠点ができるまでの軌跡（準備～urban design week, 2024）



池本 悠華

みんなで食べたご飯は本当に美味しく、伊予絊や模型の感触も、マップやグリスロから見た景色も、垣生に自分とみんながいた、忘れられない空間の記憶となりました。また、子どもも大人も、多様な方々が企画や拠点に係わってくださり、垣生での交流のさらなる広がり期待と確信が湧きました。最後に、地縁も薄く、歳も取った関西人を優しく丁寧に包んでくれた垣生班の皆さん、本当にありがとうございました。会うたびにエネルギーと笑顔、希望を分けてくれる最高のメンバーです！

大政 璃奈

昨年に引き続き2回目のスクール活動でしたが、昨年と同様に、班のメンバーに恵まれ、みんなで楽しく、協力しながらイベントを企画・開催出来たと思います。今回の活動を通して、「垣生」という、名前だけは聞いたことのあった場所が、美味しい料理・伝統・綺麗な景色があり、温かな地元の方がいる素敵な場所になりました。また、スクール活動の中で、多くの地元の方と交流し、様々なお話を聞くことが出来て良かったです。

越智 さくら

学生と社会人でイベントを作り上げるという貴重な経験をさせていただきました。ミーティングをする度に沢山の案がでてきましたが、コミュニケーションを取りながらみんなで協力して多くの案を実現させることができ、嬉しく思います。ウィーク中には高齢者から子どもまでみんなが楽しそうに交流している姿を見ることができ、これからの地域の多世代交流のきっかけのひとつになったのではないかと感じています。今回学んだことをこれからの業務に生かしていきたいです。

近藤 翔太郎

スマートシティスクールでは垣生地区を担当し、まちづくり活動に初めて挑戦しました。普段はIT職に従事しているため、地域の多世代交流を実現する方法には苦労しましたが、班のみんなの協力が大きな支えとなりました。タコ飯作りをはじめとするワークショップを通じ、子供からシニアまで幅広い世代が交流できる場を創出することができました。この経験を今後も活かし、地域に貢献できる取り組みを続けていきたいです。

谷村 凛久

今回のスクール活動を通して僕は初めてのことでばかりで手こずってしまうことも多々あったけどとても楽しくて貴重な経験をすることができました。特に松山の垣生地区での活動では様々なことをしたけど一番記憶に残っているのは模型作りです。模型作りでは現地に行ったり、作り方をメンバーと試行錯誤したりするなど一筋縄ではいかず楽しかったです。迷惑をかけることもありましたが、貴重な体験をさせて頂き本当にありがとうございました。

西原 歩佳

垣生という地域は関わりがなかったのですが、マップ作りや伊予かすりのワークショップ、グリスロでの夕日ツアーを行ったり、垣生の人と出会ってお話したりする中で、奥深い垣生というまちにとっても愛着がわきました。垣生の地域資源を生かした魅力あるイベントの企画・体験を通して、垣生を満喫することができ、また、人と人がつながることのできる場所の必要性を感じました。



林 夏衣

垣生の公民館長へ、スクールの中間報告の内容をときどきしながらプレゼンしたことを覚えています。私たちのことをあたたかく受け入れてくれ、企画の実施を喜んでいただけたことが嬉しかったです。私はたこ飯づくりをメインで担当しましたが、地域の方々のご協力があってこそ無事に開催することができ、感謝の気持ちでいっぱいです。垣生は地域住民どうしの繋がりが強く、新たな人との繋がりが次々生まれていく素敵な地域だと感じました。

古崎 杏里

普段何気なく通り過ぎていた垣生でしたが、マップ作成のためにカフェやパン屋を訪れたり、夕日の撮影では予想外に早く沈み海まで走ったり、初めてのグリス口乗車ではアトラクション並にはしゃいでしまったり、今ではそこかしこに思い出の詰まった町です。垣生の歴史やそこに住む人の想いに触れ貴重な体験となりました。

星加 有希奈

難しい部分もありましたが最後までこだわって作ったので、地域の方々にもっと垣生を好きになってもらえるような模型が作れたと思います。また今回の活動を通して、地域の拠点づくりには、その地域の良さが伝わるだけではなく、世代を越えたヒトとヒトがつながるきっかけになることも学びました。短い間でしたが、班のメンバーにとても恵まれ楽しく、充実した活動が出来ました。本当にありがとうございました。

山本 あい（TA）

受講生の方々が時間や思いを込めて制作したものやイベントに地域の方が参加してくださったり、「これすごいね」と言ってくださったりしたことが垣生にストーリーが作られている瞬間だと感じました。何気ない会話や垣生についての意見交換ができた時間が良かったです。また、お世話になった公民館の方などに顔を覚えていただけていたり、垣生の方が「こんな町になってほしい」という未来を声に出していたり、子どもから高齢の方まで元気な姿を見ることができて少しずつ垣生にまちづくりの一歩目ができているように感じ嬉しかったです。そして地域の方だけではなく班の方々ともコミュニケーションをとりながらミュージアムを作り上げることができたことが良かったです。

矢野 ひなの（サポーター）

昨年に引き続き、今年も素晴らしい班のメンバーに恵まれました。メンバーのみんなと垣生の未来を考える際、今ある垣生の特性や良さを生かして展示に繋がれたことで、地域の方々にとっても親しみやすいものになったと思います。また一人ひとりが、やりたいことを納得いくまでチャレンジできたことは、すごくいい経験になりました。ありがとうございました。

尾形 愛実（サポーター）

垣生班は、「垣生に”地域交流拠点”をつくりたい」という話から動き出したこともあり、それぞれのやりたいことと、”交流／拠点（居場所）”とどう掛け合わせばいいのか、すごく悩みながら何度も話し合った覚えがあります。でもその結果、メンバー一人一人の想いが詰まった拠点になり、その想いはしっかり垣生のみなさんにも伝わっていたと思います。1カ月という他の班と比べたら長期間ではありましたが、拠点最終日のその日までメンバーのみんなで活動できたこと、とてもうれしかったです。



03 桑原班

受講生 池川 芽衣
大政 純麗
黒川 美空
瀧川 倫太
武田 裕奈
田中 一浩
中山 真里
前 あゆみ
真鍋 一宏
諸星 宏典

サポーター 村上 雄亮 (UDCM ディレクター)
日野 順子 (UDCM アシスタントディレクター)

TA 片山 暁斗 (UDCM 学生スタッフ)

開催日 常設展示：10月12日(土)～20日(日)
イベント：10月12日(土)、13日(日)、19(土)、20日(日)
開催場所 松山市畑寺4丁目8番5号
1F：畑寺児童館／2F：畑寺福祉センター
企画内容 マインクラフトを利用したまちづくり ほか10程度
来場者数 のべ937名(既存施設のみの利用者除く)
効果検証 来場者動線確認用動画固定撮影、ヒアリング

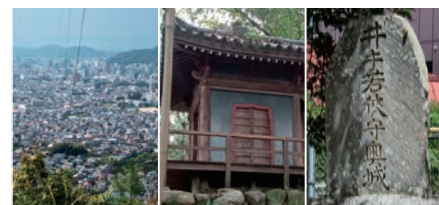
program

五感で学ぶ 桑原_(地区) LAND

一 企画の背景と目的

桑原地区は、9町(東野・正門寺・樽味・桑原・三町・畑寺・畑寺町・松末・束本)から成り、松山市の東部に位置し、地区の東に淡路ヶ峠(あわじがとう)を望み、北は石手川に面している。小学校、中学校、高等学校、大学が立地し、社寺や史跡など歴史・文化の地域資源が数多く点在する、文教の薫り高い地区である。

まちあるきをした結果、それらの地域資源の中から、淡路ヶ峠、東野お茶屋跡や市之井手水路の指揮官である井手若狭守(いでわかさのかみ)などに焦点を当て、楽しく学べるように計画した。



二 活動内容と成果

活動拠点は、桑原地区内にある施設「畑寺児童館(1階)／畑寺福祉センター(2階)」とし、広大な地区内に分散されている多くの地域資源を施設内にミュージアムとして再現した。

プログラムのコンセプトは、過去の歴史や文化を知り、今を感じて、未来を描く体験型ミュージアム『桑原(地区) LAND』(くわばらランド)である。世代を問わず楽しめるように、桑原地区の魅力を五感で学べる工夫を行った。

1階の児童館と2階の福祉センターは利用目的が異なるため、日常的に動線が変わることが少ない。そこで、同一施設内で様々な企画を同時多発的に実施することで、多世代にわたる利用者の動線が変わるようにした。今回実施した11の企画内容を動線に従って報告する。



①竹割体験 (1F 児童館 | 運動場)



児童館に隣接する運動場で、竹割体験を行った。本体験は、東野お茶屋に存在していた竹を連想させるものであり、実物の竹に触れる機会の少ない世代を対象に、竹に触れて創作する機会を創出した。また、割った竹については、竹絵馬にして持ち帰ってもらうことで帰宅後も本体験を想起してもらったり、ミュージアムに展示をすることで児童館へ誘導したりするための仕掛けとした。

竹を割る体験だけではなく、竹を割る音や竹同士がぶつかることで鳴る音、竹の匂いにより、多くの子供たちを惹きつけた。運動場で体を動かしている子供たちを半日で40名を集め、ミュージアムに導くことができた。



②桑原地区パズル (1F 児童館 | 集会室)



小学校低学年以下の子供たちもパズル遊びを通して、9つの町名から成る桑原地区の地形について感覚的に学ぶことができるように木工パズルを作成した。

子供たちがパズルを完成させるたびに周囲の大人から歓声上がるなど、多世代が交流するきっかけにも繋がった。



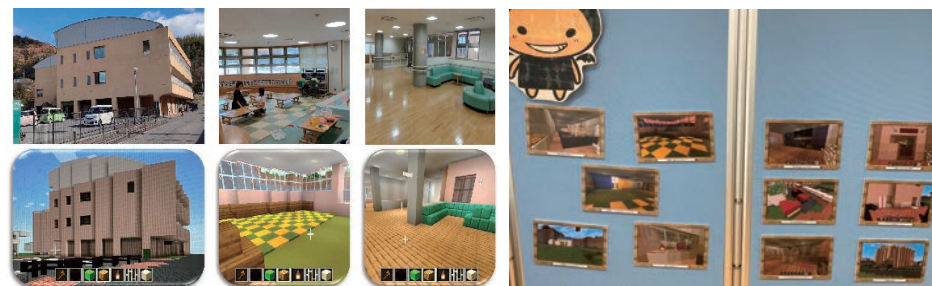
③みんなでつくるまちの未来 (1F 児童館 | 創作活動室)



マイクロソフト社が提供している3Dブロックで構成された世界で自由に建築や冒険ができる、マインクラフトというゲームの中に、畑寺児童館、畑寺福祉センター及びその周辺を再現した。その仮想空間の中で、子供たちが自由に建築することで、自分の理想のまちをつくることができるという内容である。

今回の拠点自体を仮想空間に再現したことで、より身近に感じることができる創作活動に繋がった。また、施設内の内装や周囲の建物を忠実に再現したため、子供たちは自分の思い描くまちを自由に創作することができた。

ゲームの操作方法を教えあったり、互いの建築物を見せ合ったりするなどして、子供同士の交流が発生した。また、仮想空間内に作成した作品はパネル展にすることで、マインクラフトに参加していない大人や子供たちもそれらを見ながら話し合う場面も発生した。



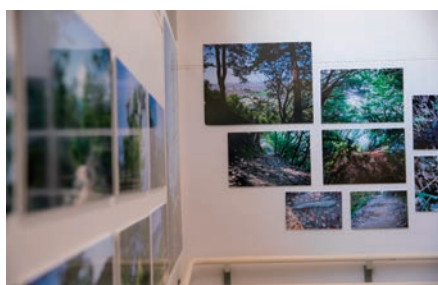
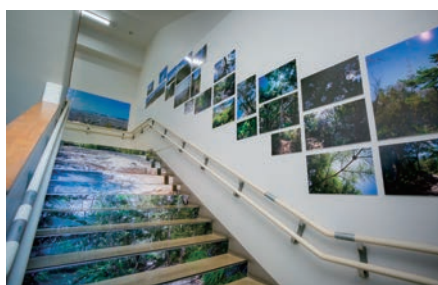
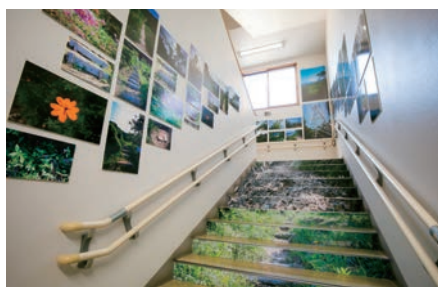
④「淡路ヶ峠」登山疑似体験（1F～2F | 階段下部）



桑原地区の方々が「淡路ヶ峠遊歩道整備管理協議会」を作り、東野側、桑原中学校や宝ノ谷から登るルートを中心に淡路ヶ峠の登山道の整備・管理を行っている。2012年6月、3コースが完成している。宝谷池奥、宝ノ谷から鶴ヶ畝尾根に至るルート「ガンバル赤シャツコース」、宝ノ谷の砂防ダム奥の谷を詰めて山頂に至るルート「ゆったりマドンナコース」、桑原中学校裏から鶴ヶ畝尾根に至るルート「青い空 坊っちゃんコース」が整備された。

今回は受講生たちで実際に淡路ヶ峠を「青い空 坊っちゃんコース」から登り、その際に撮影した80枚を超える写真を階段に展示することで、疑似登山体験ができるようにした。淡路ヶ峠を登っていく順序通りに写真を展示したり、淡路ヶ峠で録音した鳥や虫の鳴き声、風の音を階段に設置したスピーカーから流したりすることで、臨場感を演出した。

淡路ヶ峠の登山について、体力的に困難であったり、日々の生活で時間を割けない方々から、「階段を上るということで、過去に登った記憶が蘇った」「こんなにきれいな景色があるところだと初めて知ったので、今度家族で登ってみたい」などの声が多くあった。



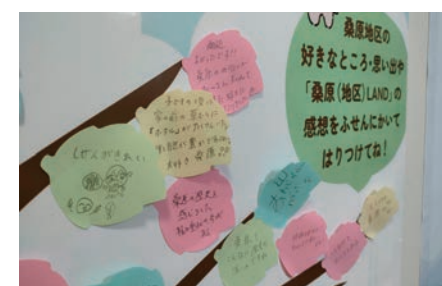
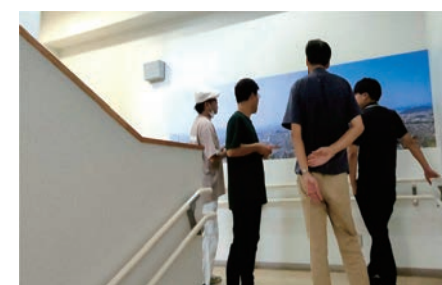
⑤「淡路ヶ峠」登頂疑似体験（2F | 階段最上部）



淡路ヶ峠は、桑原地区の東に位置し、標高は273mである。頂上の展望台からは、東に金比羅街道、石鎚山、南に土佐街道、久万山、南西に大洲街道、伊予地区、瀬戸内海の島々、北に高縄連山、眼下には松山城を中心に松山市内を望むことができる。市街地から見れば、朝日が立ち昇る町「くわばら」の象徴でもある。この山頂には、天正年間(1573～1587年)、道後湯築城主・河野通直の家臣であった林淡路守通起が守っていた砦があった。

2階までの階段を上り切った後は、淡路ヶ峠の山頂から見える景色を今回撮影した”90cm×350cmのパノラマ写真”や桑原地区の方々から事前に提供いただいた”みんなが登頂した写真”を展示することで、登頂した感覚を味わえるように工夫をした。また、桑原の魅力を記載できるコーナーを設け、各々の桑原への想いを葉のない木のイラストに葉型の付箋に記載して、貼り付けてもらった。

パノラマ写真の前には、多くの人が集まり、自宅や松山城を見つけたり、まちの変化に気づいた内容をそこに居合わせた方同士で話す光景が見受けられた。桑原地区に対する想いだけでなく、その会話の内容が付箋に記載されていた。



⑥「東野お茶屋」空間再現 (2F 福祉センター | 談話コーナー)



東野お茶屋は、松山藩松平初代藩主定行の隠居所として、裏千家千宗安の設計のもとに庭園と御殿が建造され、寛文元年(1661年)に完成した。記録によると、周囲1里あまりを竹垣で囲み、北門を入ると東西に馬場があり、馬場東詰の中門を入ると御殿があった。御殿の西には壮大な池泉があり、周囲の起伏した地形を利用して、「風呂のお茶屋」「傘のお茶屋」「いろはのお茶屋」等の草庵や安心堂などの小堂が配されていた。

今回伐採した竹や毛氈を敷いた縁台、野点傘を利用して、東野お茶屋を談話コーナーに再現したうえで、お琴や三味線による和風音楽を流すことで、没入空間を演出した。桑原地区に立地する松山東雲女子大学・短期大学や愛媛大学の茶道部の方々に協力していただき、呈茶を行うことで、400年前の雰囲気醸成した。また、その空間で学生たちが地区の歴史に関する朗読をすることで、東野お茶屋に関する学びの機会を創出した。

結果として、五感のすべて(視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚)による学びと安らぎを提供するとともに、普段交流することのない世代間での交流を生むことができた。地元の方との会話により、地域の歴史を再発見するきっかけにもなった。



⑦出土品実物展示 (2F 福祉センター | ホール)



東野お茶屋跡の中に存在する丘陵の一部は盛土による堤であり、池の堤と同一工程で築造された。平成7年の「東野お茶屋台遺跡5次調査」により、盛土の頂上部から出土した土師器の皿と寛永通宝の実物を常設展示した。また、松山市考古館の学芸員の方を招き、それらの出土品の解説を行った。

当該箇所の出土品は、出土後展示や解説する機会が少なかったため、平日の日中の時間帯にもかかわらず、学芸員の解説に多くの方々が集まり、地域の歴史について学ぶ機会を創出できた。

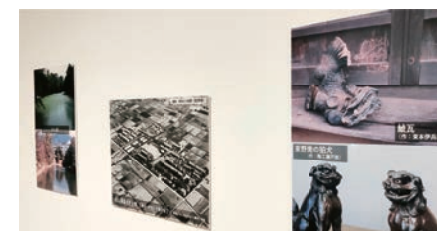


⑧歴史写真展 (2F 福祉センター | ホール)



桑原地区まちづくり協議会が所有している祭りなどの地域行事や歴史に関する写真を拝借し、それらに受講生たちが調べた内容を記載することで、より一層地区の歴史を学ぶことができる写真展を行った。また、協議会による全面協力もあり、協会イメージキャラクター「くまばらさん」による解説パネルも作成した。

昔の写真を見て、現在の状況と比較することで、昔話に花を咲かせるシーンが見受けられた。何十年も前の地域行事に親族の方が参加している写真を見て、感動する方も見受けられた。



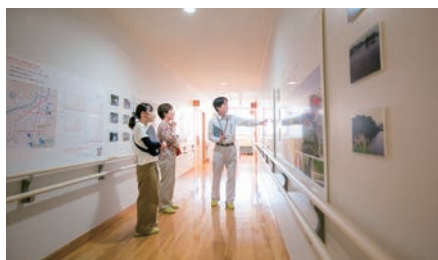
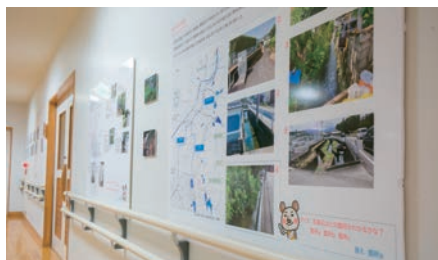
⑨水路ミュージアム (2F 福祉センター | ホール)



今から約 450 年前（永禄年間）、河野氏の家臣松末美濃守の旗本井手若狭守が、石手川上流から桑原郷に 9 年余りの年月と多くの苦難を経て「市之井手水路」を開いた。水不足に困っていた多くの農民を救った功績を讃え、神として祭った。明治 42 年頃に須賀神社の境内に移され、旧神社跡にこの碑が建てられている。

井手若狭守を中心とした先人たちのによる功績である桑原地区の灌漑用水を A0 パネル 10 枚により表現した。また、今回撮影した水路の動画を放映することで、バーチャル水路ツアーを実施した。

様々な書物を読み解き、水路関係者にヒアリングをした内容を整理したうえで、今回のパネル展示にしていたため、来館者から知らないことが多くあったと驚きの声があがった。



⑩水を感じる空間 (2F 福祉センター | ふれあい交流室)



様々な世代の方が、水について考えるきっかけとなるように、桑原地区の水の中をイメージした空間を創出した。

遊べることを意識した空間にしたこともあり、子供同士が走り回ることによって新たな交流が生まれた。また、多くの方に撮影スポットとして利用された。



⑪桑原地区クッキーづくり (2F 福祉センター | 調理室)



子供たちに地区に関心をもってもらうため、9つの町名からなる桑原地区の地形を 3D プリンターで型を作成し、クッキーづくりを調理室で行った。

クッキーづくりを通して、自らが住む地域の形状や地域資源の位置を学ぶ機会を創出した。また、調理室で行っていると、イベントを連携していた子ども食堂の方や茶道部の方からクッキーづくりに関してアドバイスをもらったり、互いの料理を交換したりするなど、バックヤードでも多くの交流が発生した。



— 得られた課題

初日である 10 月 12 日の来館者数は、私たちの想定を大きく下回る人数であった。効果測定を目的とした来館者の動線記録を確認した結果、私たちはミュージアムの来館者を各エリアで待つという対応に留まっていたことが判明した。そこで翌日以降、得られた課題を解決するた

めのミーティングを重ねた。当該施設内に人自体は多くいるため、特定の部屋にミュージアム以外の目的を持って来館した方々をミュージアムに誘導する仕掛けや多様な世代に関心を引くための仕掛けが必要であるという結論に至ったことから、様々な取組みを追加で実施した。

一 課題に対する様々な取組み

【ミュージアムの存在を示す工夫】

パネルなどの展示会場は2階であるため、1階から2階への誘導が困難であったことから、入り口が目立つように大きなゲートを設置した。そして、ミュージアムのコンセプトを記載したポスターをゲートをくぐった直後に、大きく貼り付け、その存在を示した。



【企画内容の工夫】

前述の「①竹割体験」「⑩桑原地区クッキーづくり」は、児童館に他の目的で来ている子供たちの興味をミュージアムに向けるためのきっかけづくりとして、2週目の土日に急遽追加した企画である。

それらの企画で発生する竹を割る音やクッキーの甘い匂いなどを活かし、来館者を五感により集めることができた。

また、運動場や体育館で遊んでいる子供たちと受講生と一緒に遊ぶことで、ヒト(受講生)に関心を持ってもらい、その子供たちの関心をミュージアムへ向け、展示会場に誘導することもできた。名前のついた企画内容は11個であったが、それ以上の数の取組みを実施した。



【動線を生む工夫】

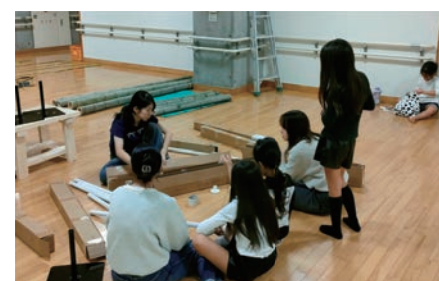
子供たちが多く集まる1階の児童館から、パネル展示などを行っている2階の福祉センターに子供を誘導する仕掛けとして、主要な4つのエリアに4枚のシールを配置した。それらを集めて台紙に貼ることで、桑原地区とそこにある地域資源の場所が完成するパズルを作成し、1階から2階への動線を創出した。



一 様々な取組みによる効果

初日の来館者数は64人であったが、最終日の来館者数は初日の約4倍となる249人であった。この成果は、受講生が10人にもかかわらず、11を超える内容をアグレッシブに実施した結果であると考えられる。施設内のどの部屋にも笑顔が溢れ、桑原地区へ関心を持ってもらうためのきっかけに繋がった。

初対面同士の方が展示を通して、桑原地区について話し合ったり、広大なミュージアムを案内してくれる子供たちも現れたり、多くの新しいコミュニティが発生した。最終日の撤去作業時には、今回の取組みを惜しみ、多くの来場者たちが自主的に手伝いをしてくれたことで、まちづくりにおいては、ホストもゲストもないことを私たちは教わった。



一 今後の展望

今回作成した展示パネル等は、当該プログラムを企画時から協力して下さった「桑原地区まちづくり協議会」へ譲渡した。今回の取組みを一過性のものとせず、桑原地区で継続して地域の魅力を発信できるように、貢献していきたい。

プログラムの終了後も、今回の活動に

関わってくださった大学や企業、協議会同士が連携を深め、桑原地区に関するイベントを行っている。私たちの活動が、行動変容に繋がったのかもしれない。地域のさらなるシビックプライド醸成に向け、今後も起爆剤となるような活動に繋がっていく。

一 ご協力いただいたみなさま

(広報協力については省略)

- | | | |
|----------------------|-----|--------------------|
| ○畑寺児童館 / 畑寺福祉センター | ・・・ | 施設利用、運営サポート等 |
| ○桑原地区まちづくり協議会 | ・・・ | 資料提供・キャラクター使用承諾等 |
| ○桑原公民館 | ・・・ | 資料提供等 |
| ○松山東雲女子大学・短期大学 | ・・・ | 呈茶、各種相談協力等 |
| ○松山市考古館 | ・・・ | 資料提供、出土品解説等 |
| ○松山工業高等学校 | ・・・ | 木工パズル作成、3Dプリンタ協力等 |
| ○愛大ゲームラボ | ・・・ | マイクラ技術支援、PC貸出協力等 |
| ○愛媛大学茶道裏千家愛和会 | ・・・ | 呈茶等 |
| ○門田恭一郎先生 | ・・・ | 水路に関する取材協力、書籍提供等 |
| ○樽味水利組合 | ・・・ | 水路に関する取材協力等 |
| ○亀井製菓株式会社 畑寺店 | ・・・ | 地区内の協力者の紹介、茶菓子の提供等 |
| ○松山ミュージカル俳優の仲間たち | ・・・ | 地域の歴史朗読 |
| ○北条地区のみなさま | ・・・ | 竹の伐採、提供 |
| ○中筋地域づくり活動センター | ・・・ | 竹の伐採、提供 |
| ○こじゃんと中筋 | ・・・ | 竹の伐採、運搬補助 |
| ○NPO 法人ライフサポートアゴラ | ・・・ | 子ども食堂との連携企画協力 |
| ○社会福祉法人 きらりの森 | ・・・ | 展示品提供 |
| ○桑原小学校 | ・・・ | キャラクター使用承諾 |
| ○受講生の両親、兄弟、姉妹、友達 etc | | |





池川 芽衣

桑原班はモチベーションが高い方が多くレベルの高い活動をしていたと思います。特に社会人の方や高校生の方、とても内容の濃い展示をつくられていて圧巻でした。桑原地区のことはあまり知りませんでしたが、活動する中で桑原の魅力に気づくことができました。貴重な体験ができる機会をありがとうございました。

大政 純麗

桑原地区の魅力の再発見ができた期間でした。桑原地区クッキーを作る企画では、子どもたちが焼き上がったクッキーを囲んで嬉しそうだったことが印象に残っています。多様な世代と関われた今回の機会は、班の方の奇想天外なアイデアを取り入れたり、自分の視野を広げたりすることができたので、貴重な経験でした。今後の活動にも活かしていきたいです。ありがとうございました！

黒川 美空

今回の活動を通して、知らなかった桑原地区の魅力をたくさん知ることができました。また、今回のようなプロジェクトに参加することが初めてということもあり不安もありましたが、班のみんなが面白く、温かいメンバーたちだったので、不安も無くなるくらい濃い時間となりました。当日は、子供たちから大人まで多くの世代の方に喜んでもらうことができ、良い経験ができました。今回のプロジェクトで学んだことを活かして、松山の活性化に貢献していきたいです。

瀧川 倫太

実家のある桑原地区での活動で、地域資源や魅力の再発見ができました。担当した写真展示を見た方から、自分が思いもよらない方向からの良い評価をいただいたこともうれしかったです。日頃何気なく生活する地域を、自身の魅力的なルーツやコミュニティとして捉え直して共有することは、住民個々人の暮らしにおいても、とても意義のあることだと感じました。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

武田 裕奈

まちあるきを通じて、桑原の歴史や文化、桑原地区の魅力を改めて実感しました。この魅力を伝えるためには、どのような方法が最も効果的かを考える過程も非常に楽しかったです。展示当日には、地域の子供たちが展示を通じて桑原の歴史や文化を学び、それを家族や友達と共有する姿を見ることができたことは大変嬉しかったです。さらに、このプロジェクトを通じて、多くの新しい出会いや繋がりが生まれたことも忘れられません。これからも、この繋がりを大切にしながら、さらなる地域活性化に向けた取り組みを続けていきたいと強く感じました。このプロジェクトに参加できて本当によかったです。

田中 一浩

桑原地区のまちの成り立ちに迫ってみたいと思い、現地で気になった農業用水路に焦点を当てた展示資料を作成しました。水路施設は、先人の知恵が満載で、農業の発展にも大いに貢献しており、さらにその後の農地の土地利用の変化など歴史を巡ることができました。展示物を熱心に見てくださる方から多くの感想をいただき、知的で楽しい体験をすることができました。

中山 真里

桑原地区は歴史があり、文化があり、自然がある盛りだくさんなまちでした。地域の方々が、「何気なく暮らしているこの町は、過去から現在に、そして未来に引き継がれるべきものがたくさんある特別な場所だ」と誇れようなミュージアムになって欲しいと思いながら準備をしました。当日は、子供たちが多く参加してくれて笑顔がたくさん見れたので嬉しかったです。また、子供たちにとってこの桑原(地区) LANDが”桑原での楽しい思い出”として残っていたらいいなと思いました。

前 あゆみ

メンバーの人たちが温かく、アットホームな雰囲気の中で活動を進められたので、今年初めて参加した高校生の私でも、意見を出したり充実した活動ができました。自分たちが伝えたい桑原地区の魅力と来場者が楽しめるものを同時に作り出すのは難しかったですが、メンバーの特技や知識を出し合って、とても素敵な桑原(地区) LANDを作り出せました！

真鍋 一宏

メンバーが大人数になると、それぞれの関心事や、活動に割ける時間がバラバラで、一体感を醸成する難しさを感じながら活動に取り組んでいました。具体的に何を作りたいかではなく、チームとしてどのようなミュージアムを目指すか抽象的なイメージをまず共有する、軽作業は極力全員でやるようにする、担当しているエリア全部の裁量を持たせて自由にやってもらう等、一見非合理に思えるやり方に、チームとしてのまとまりを生むことができる要素があったんだなと実感することができました。実際のまちづくり活動に悩んだ際はこの経験を役立てたいです。

諸星 宏典

初めての参加でしたが、世代を越えて取り組ませていただける環境がありました。3ヶ月という短い時間でしたが桑原地区へ通い、魅力を知っていく中で愛着が湧いてきました。地域の方へ協力を仰ぎ、多くの方に関わって下さるミュージアムになりました。まちづくりへの新しい関わり方を学ぶことができ、有意義な時間でした。

片山 暁斗 (TA)

自分の地元である桑原に一生で一番向き合った時間でした。しかし、それだけ向き合った自分でも知らなかったり、気づけなかったりする地元の魅力に班員の皆さんが客観的な視点を持ちながら気づかせてくれました。さらにそれを自分たちの長所を活かしながら、表現できたかけがえのない活動だったと思います。TAという立場でスクール生と一緒に作りあげた今回の経験をこれからの人生に活かしていきたいです。

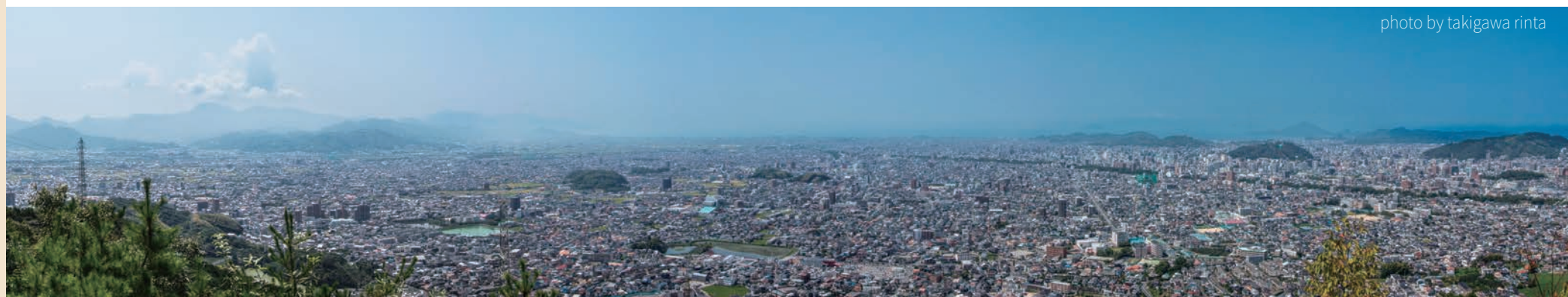
日野 順子（サポーター）

最初のまちあるきの時に感じた、とても広大な地域であることと豊富な資源。何を選んでどう表現していくか、やりたいことが明確なリーダーの集まる班でした。リードしながらお互いをサポートするという、全てに関わっていったことも桑原班の特徴だったように思います。地域の方々にもその勢いのまま受け入れていただけたことがとても嬉しかったです。今後もそれぞれの分野において熱いハートで活躍されることを期待しています。

村上 雄亮（サポーター）

桑原班は、個性とやる気に満ち溢れた方が非常に多く、受講生の半数がアカレンジャーという感じのグループでした。日々湧き出てくるみなさんのアイデアを一つでも多く形にできるほどの広大な施設を拠点にできたこともあり、今回のようなダイナミックな活動に繋げることができました。約3ヵ月に渡る週2回の打合せで積極的に議論を交わすことに加え、当日の運営も全員が各々の得意分野で笑顔で躍動し、周囲の人を笑顔にさせている姿は、すごく頼もしかったです。また、自分一人だけで物事を進めようと背負い込みすぎず、明確なビジョンを示したうえで、多くの人々を巻き込んだ活動ができたので、受講生たちだけの活動では決して見れない光景と一緒に見ることができました。今後も誰かのため、地域のために、積極的かつ創造的に活動される姿が目に見えます。その起点にもなり得る今回、同じ場所で同じ時間をみんなで過ごせたことを幸せに思います。

photo by takigawa rintar



04 パーソントリップ班

メンバー 増田 慧樹 (UDCM 研究員)
 Laureen Attolou (東京大学研究員)
 花本 悠輔 (UDCM 学生スタッフ)
 日野 順子 (UDCM アシスタントディレクター)
 サポーター 村上 雄亮 (UDCM ディレクター)
 展示サポート UDCM 学生スタッフ

開催日 10月12日(土)～31日(木)
 開催場所 松山市花園町4-9 岡田ビル1階 松山アーバンデザインセンター
 企画内容 令和5年松山都市圏パーソントリップ調査の分析をもとに、
 松山の移動の特徴クイズ、都市・交通政策の提案、
 国内外の都市の事例紹介、データ可視化タッチシュボードの体験、
 動画による解説等を行った。
 来場者数 294名 (UDCM・もぶる라운ジの来館者数)
 効果検証 来場者アンケート、意見・感想コーナーの設置

program

松山パーソントリップパネル展

ー 企画の背景と目的

パーソントリップ調査とは、人々が日常生活の中で、いつ・どこへ・何の移動手段で・何の目的で移動しているかについて調査した、大規模かつ公的なアンケート調査である。松山市では2023年に16年ぶりにパーソントリップ調査を実施し、得られた移動データは、松山市駅・JR松山駅周辺の交通拠点整備や、郊外部の移動困難地域の解消など、次の数十年の都市交通計画づくりのための基礎的なデータとして用いられる。

今回、私たちの班は、松山市からパーソントリップ調査のデータを提供いただき、データから明らかになった松山の移動の特徴と課題を市民の方にわかりやすく伝えることを試みた。それと同時に、展示に来場された方との対話を通じて、新たな分析の視点や、今後の松山の都市交通計画に必要な考え方を得ることを狙いとして展示を行った。

ー 活動内容

都市と交通に関するデータと事実に興味をもってもらい、自らの日常生活の移動習慣を顧みてもらうために、パーソントリップ班では、さまざまな伝達媒体・タッチポイントを用意した。

パーソントリップクイズ

パーソントリップ調査を分析して明らかになった、松山の住民の移動や生活の特徴をわかりやすく、楽しみながら学んでもらうために、17問のクイズを作成した。もぶる라운ジの入口を入ると、左手にクイズの問題を書いたパネルが並び、来場者はクイズの答えを予想してパネルをめくると、(意外な)答えとともに、解説の文章が記されており、移動や交通の特徴や課題を学べる仕掛けである。



特に、「19～25歳の若者のうち、休日に外出した人は何パーセント？」(49.3%)というクイズや、「200m未満の移動のうち、自動車による移動は何パーセント？」(30.5%)というクイズは、来場者の予想に反することが多く、若者が街に出かけたくなるまちづくりや、自動車に依存しないライフスタイルの必要性などの議論を呼び、反響が大きかった。



国内外の事例・図書の紹介

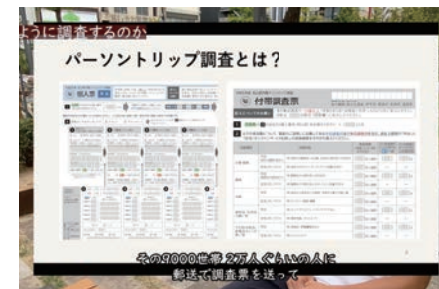
クイズを通じて学んだ、松山の課題を解決するためのヒントとして、国内外の都市の取り組みの紹介や、もぶるラウンジ内の参考図書の紹介を行った。

具体的には、①子ども・若者にとって楽しいまち、②公共交通が使いやすいまち、③自転車にやさしいまち、④歩いて楽しい中心市街地の4つのテーマについて、事例と図書の紹介を行った。クイズによって関心を持っていただいた来場者の方が、さらに深掘りして詳しく事例を知ろうと、熱心に本を読まれている光景が見られた。



データ可視化ダッシュボード

データの集計結果に、より直接的かつインタラクティブに触れられるよう、パーソントリップ調査のデータ可視化ダッシュボードを作成し、パソコン上で操作できるようにした。調べたい地区や個人属性を選択すると、該当する住民の交通手段、目的地、外出率、地区の人口構成等が表示されるシステムである。クイズでは伝えきれなかった、地区レベルの情報や、年齢や免許の有無による行動の違いを調べられるため、自らの生活と重ね合わせながら、多くの人に楽しんでもらうことができた。



動画による見どころの解説

パーソントリップ調査の概要や、データからわかったことをわかりやすく伝えるため、動画を放映した。

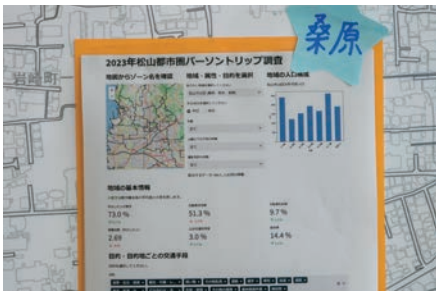
松山の公共交通が走る都市の風景を放映し、公共交通の利用に対する意識を醸成することを試みた。また、一見縁遠い事柄に思える、データ分析や交通調査について、話言葉で平易に伝えることで、展示へと関心を向けさせるつかみとして機能したと考えている。

地図による地区の特徴展示

もぶるラウンジ内にある、松山中心市街地の地図上に、データ可視化ダッシュボードの分析結果を印刷して掲載した。

大きな地図上に示すことにより、パソコンの操作が苦手な人でも、各地区の特徴が一目でわかる。また、地図に掲載されていない地区に関しては、データプラットフォームを直接操作する必要があるため、地図とデータプラットフォームが補完的な役割を果たしたといえよう。

また、スマートシテスクールで活動する、まちなか、垣生、桑原の情報を掲載することで、拠点間の連携を図った。



松山の都市・交通政策の提案

以上の展示により見えてきた、松山の都市や交通に関する課題を解決するため、今後の松山の都市・交通計画において重要になる考えられる政策を提示した。

一つ目は、中心市街地での自動車利用を減らすこと。二つ目は、より良い公共交通と自転車インフラを整備すること。三つ目は、市民に対するコミュニケーションと移動手段に関する倫理観を醸成すること。四つめは、中心市街地の魅力を高めることである。

四つの論点を来場者と共有し、その是非について活発に議論できた。



【広報・発信】

今回の展示内容は、全てインターネット上で公開しており、展示期間終了後も、展示を見ることが可能である。

<https://udc-matsuyama.github.io/school2024/>

展示期間中にとどまらず、今後も多くの人の目に展示内容が触れることで、松山の都市と交通について分析・調査・議論する際のプラットフォームとして、今回の展示やダッシュボードが活用されてほしいという思いから、Web ページを作成した。



展示内容の解説

問の番号	内容	リンク
1	松山人の休日の外出率	詳細を見る
2	若年層の休日の外出率	詳細を見る
3	子育て世帯の休日の外出率	詳細を見る
4	子育て世帯の食事・娯楽・レジャーの行き先	詳細を見る
5	若年層の食事・娯楽・レジャーの行き先	詳細を見る
6	移動手段の割合	詳細を見る
7	200m未満の移動の自転車利用率	詳細を見る
8	若年層の移動手段	詳細を見る
9	高齢者の外出率	詳細を見る



また、今回の展示を周知するために、松山アーバンデザインセンターの学生スタッフの協力のもと、チラシを作成した。チラシのデザインには、変化する松山の風景の写真を配し、それを映すデータの客観性を表現するため、モノクロのシンプリなデザインとした。



一 成果

展示期間中には、(展示を見る目的で来たわけでない) もぶるラウンジの利用者を含む、多くの人に展示を見ていただいた。公民学の連携拠点である UDCM で展示することにより、市民の方はもちろん、行政の関係者や関連分野の民間企業、大学関係者など幅広い方に興味を持っていただいたことは成果である。

アンケートの感想欄には、「クイズの数値が予想通りだったり違っていたり、おもしろいと思った」、「外出率が大幅に減っていることに衝撃」、「すごくわかりやすく、移動について初めて真剣に考えることができました」といった感想をいただいた。普段何気なく選択している、おでかけ先や、交通手段について、改めて考えてみる、きっかけとなる展示になった。

また、展示会場で実施した意見箱型の調査「市長になったら何をする？」では、来場者の方から、今後の松山に必要なさまざまな計画上の論点を提示していただいた。例えば、

- ・ 郊外の活動拠点となる施設を建てる (児童館、福祉センターのような)
- ・ 駐輪場とゴミ箱をたくさん作る
- ・ JR 松山駅の横に芝生ありの複合施設をつくる
- ・ 子どもの遊び場、若者の集まれる場、

お年寄りのお茶スペースなど集まれる場所をつくる

- ・ 学校を無償化して子どもを育てる負担を減らしたい
- ・ 城山公園に滞在しやすいようベンチを増やす

などの意見が出た。展示の内容やスクールの趣旨と呼応するように、まちなかにも、郊外にも、子どもからお年寄りまで、多様な方が集まって過ごせる場所が求められており、展示を通じて、そのことを共有し、再確認できた。



一 今後の課題と展望

今回は、展示を見た方の属性別に、さらに大きなインパクトを与えられるように、展示内容を先鋭化させる必要がある。

例えば、市民の方が車中心のライフスタイルを見直し、行動変容を促すために、ビジュアルを活用した親しみやすい展示や、ワークショップやデジタルデバイスによる双方向型の展示を取り入れる必要があると考える。

また、まちづくりに関わる住民、企業、行政の方に、データやシステムがまちづくりに使える！とっていただけるように、システムの更なる改善が必要である。例えば、実際のまちづくりプロセスを意識したシステムの活用方法の提示や、様々な都市データの追加、予測モデルによる政策評価を組み込んだシステムへの発展等に、今後は取り組みたい。



一 ご協力いただいた方々

展示物の作成

UDCM スタッフ

山路さま、山地さま、大野さま、
片山さま、川中さま、内田さま、
谷淵さま、井出之上さま、竹内さま

事前ワークショップへのご参加

尾形さま、竹内さま、内田さま、
高橋さま、川中さま、山本さま
山本さま、谷淵さま、柴岡さま

データのご提供・アドバイス

松山市都市整備部都市・交通計画課のみなさま

復建調査設計株式会社 石飛さま



増田 慧樹

松山のことをよく知らないまま、PT 調査の膨大なデータを前にして、実感も湧かずどう分析していいかわかりませんでした。Laureen の海外経験、花本の地元と先端を行き来する視点、UDCM 学生スタッフの語る松山生活や地域資源から、データと現象が結びついた時は嬉しかったです。展示をほぼゼロからリーダーシップで作上げてくださった日野さんと UDCM スタッフに大感謝です！楽しかった！

Laureen Attolou

I typically address transportation issues through data analysis, but in Matsuyama, I gained a new perspective by walking in the city and using various transport modes. This firsthand experience provided deeper insights. The workshop discussions with students also helped me connect data-driven questions to real-world challenges. I find the smart city school's approach promising and believe it could lead to more inclusive, efficient urban systems.

花本 悠輔

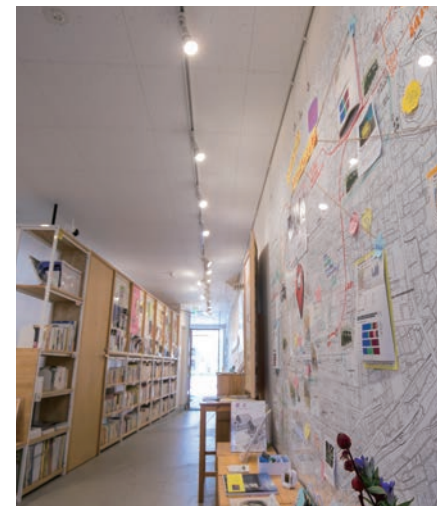
スクールの活動を通じて、自分の視野を広げることができました。リーダーの増田さんを中心に、日野さんや Laureen といった異なる強みを持つ多様な人材と議論し、自身の専門と異なる問題に向き合うことで研究だけでは得られない体験を得ることができました。今後も多様な人材と協働し、様々な分野の課題解決に取り組んでいきたいと思っています。

日野 順子

パーソントリップの展示に関わることで、これまで無意識に選択していた移動手段について意識するようになりました。車が壊れたタイミングとも重なったため、徒歩・公共交通機関・送迎に頼る・レンタカーなど、あらゆる手段の便利さと不便さを実体験！街の住人として今後のことを考える必要があるなと実感しました。展示作業に巻き込んだスタッフ共々、関わらせていただきありがとうございました。

村上 雄亮（サポーター）

都市データプラットフォームの制作過程においては、客観的なデータのみに頼らず、現地を訪問し、地元に住む方の意見を徴収したうえでの課題の抽出と政策の提案をする姿勢は脱帽でした。さらに、その姿を見てきた人たちが、展示等を率先して手伝っている光景は、とても印象的に残っています。”客観的なデータの必要性”だけでなく、”人を動かす行動力の重要性”についても、教えていただいた良い機会となりました。本当にありがとうございました。



05 その他連動企画

メンバー 片山 暁斗 (桑原班 TA / UDCM 学生スタッフ)
 近藤 美咲 (まちなか班 TA / UDCM 学生スタッフ)
 山本 あい (垣生班 TA / UDCM 学生スタッフ)

活動期間 9月☒10月20日
 企画内容 各拠点中継
 各班 MTG 共有
 ポスター掲示

program

TA 企画 | 各班連携拠点中継

一 企画の背景と目的

各拠点のサポートメンバーとして参加した私たちは、来場者がまちに対して興味関心を持つと同時に、受講生が今回の活動において各拠点につながりがあるという意識を持つためには、何ができるかを考え、4つの目的を掲げた。

- 様々な立場、想いでまちづくりに取り組んでいることの発信
- 地域住民がまちづくりに関心や興味を持つきっかけを与えられる場づくり
- 来場者に1ヵ所だけでなく、複数の拠点に訪れてもらうきっかけづくり
- 他班を含む受講生全員が一緒にまちづくりに参加しているという意識の創出

上記4つの目標達成のため、各拠点で他の班の拠点も紹介する取り組みとしてポスター・写真掲示や中継などを行った。

一 活動内容

各拠点中継

urban design week. の来場者が、複数の拠点に訪れるきっかけとして、また、他班の受講生同士と一緒にまちづくりをしているという意識醸成のため、urban design week. 2024 の期間中に、各拠点から他の拠点の様子をリアルタイムで映し出す同時中継企画を行った。

このとき、一方的な配信ではなく、双方向でコミュニケーションが生まれるような zoom を活用した。

各班 MTG 様子共有

受講生全員でまちづくりに参加しているという意識の醸成や、他班からも良い刺激をもらえればという想いから、もぶるラウンジのミーティングスペースに、各班のミーティングの様子を写真とコメント付きで紹介するホワイトボードを設置した。

このとき、文字だけでなく写真を入れて共有することで、他の班が何をしているか可視化できるように工夫した。



一 成果

ポスター作成

今回の活動に際して、2種類のポスターを作成した。1つ目は、各班の紹介ポスターである。各拠点のつながりを表現できるような写真や紹介文にした。さらに、各班の受講生に対して行ったインタビュー内容を載せることで、様々な立場、想いでまちづくりに取り組んでいることを周知した。

2つ目は、urban design week. 2024 全体の実施概要ポスターである。このポスターは、見た人がまちづくりに興味を持つきっかけになれるような想いを込めて作成した。この2つのポスターは、urban design week. の期間中に各拠点にて設置した。



拠点中継では、カメラに向かって手を振るなど、拠点同士でのコミュニケーションが生まれていた。また、「拠点同士の距離が離れていても、中継を通じて心の距離が近くなった気がする」という意見もあった。他の拠点の来場者の世代や人数、場所の雰囲気が中継を通して分かることで、「面白そうだな、行ってみたいな」と言っていただけの来場者もいた。

各班 MTG の様子を共有したホワイトボードでは、写真での共有が特に効果的であった。ミーティング前に、受講生が他の班の様子を見て「すごい!」「面白いことしているね」など、お互い良い刺激を与えあっているように感じた。また、他の班に知り合いがいる受講生は、お互いの写真を見て楽しそうに話していたり、写真を撮ったり、メッセージを書いたりする様子も見られた。

作成したポスターは、特に来場者に対して効果があったように感じる。実際、ポスターの前に立ち止まり、「他の場所でもやっているんだね」や「これはどういう活動なの」など、興味を持った来場者が、スタッフに声をかけている姿が多く見られた。

一 課題と今後の展望

今回の活動を通して得られた課題は、来場者に対して、他の拠点の活動を知りきっかけで終わってしまったことだ。具体的には、他の拠点の様子をみて、行ってみたいという意見はあったものの実際に足を運んでもらうまでには至らなかった。ただ、この課題は計画段階から想定していた事でもあった。この課題に対して私たちも試行錯誤を重ねたが、今回の結果から、改めて、実際に足を運んでもらう事の難しさを学んだ。

一方で、今回の活動により、例年漠然としていた各班のつながりを可視化することができた。これにより受講生同士のつながりや、まちづくりに対する意識をより一層向上することができたと思う。今回得られた成果から、今後も、私たち TA が、各班のつながりの可視化、受講生同士の交流の場の創出を担ってきたい。



一 感想

今回の活動の一番の成果は、受講生同士の一体感の創出であると考えている。年齢や職業が異なる人同士でチームになり、進め方や創造するもの異なる中で、班や受講生本人にもいい刺激を与えあうことができた。「共通して松山のまちづくりに携わっている」という、つながりを感じながら準備期間を過ごせたのではないだろうかと感じる。

当日は、ポスター掲示や、各拠点の中継をすることで、来場者の方にも他の拠点/班の活動に興味を持ってもらうだけでなく、まちづくりに取り組んでいる人がいろいろな場所にいて、いろいろなカタチでまちづくりがされていることを知ってもらえるきっかけになったと思う。



講師メッセージ

松本 啓治（まちあるき | 坂の上の雲ミュージアム 前総館長）

スクール生の皆さん、お疲れ様でした。どの班も想いのこもった作品でした。

まちなか班が製作していた映画館の今昔は、中心部の賑わいの歴史と深い関係にあります。映画館の前は芝居小屋でした。よく調べられていたと思います。

垣生班での伊予絃やたこ飯の製作は、昔懐かしい思い出と一緒に思い出させてくれました。テーブル上の伊予絃の一輪の花には感激しました。

桑原班の市の井手の調査は、個人的には大好きでした。農業用水が届かない荒地に石手川の水を通し良田に変えた井手若狭守の物語には感動しましたし、桑原地区の用水路の流路調査の専門性には驚かされました。淡路ヶ峠や東野お茶跡は桑原地区というよりも松山の宝物ですね。

関 厚子（ミュージアムを表現する | セキ美術館 副館長・学芸員）

毎年、松山の素晴らしい場所に目を向ける機会を頂いています。

今年は、幅広い年代をターゲットにした体験型、参加型のプログラムが多く実施され、来場者が楽しめる事も大切に企画だったと思います。約3か月の短い期間でかたちにすることは様々な苦労があったと推察します。お疲れ様です。

個人的に、高校生の頃に賑わっていた銀天街が、淋しい状況になっていることに心が痛みます。活気を取り戻せるように、アイデアを出し合って新しい街をつくりたい、という気持ちに溢れたラウンジでした。松山市が未来に向けて発展し続ける街であるように、少しでも力添えが出来たらと思います。

中野 靖子（ミュージアムを表現する | 伊丹十三記念館 学芸員）

urban design week. ではどの会場も地域特性をよく捉えた充実の内容で、松山の広さ・文化の多彩さに楽しく圧倒されました。そして、受講生の皆さんの柔軟な閃きと地道な積み重ねがひしひしと感じられ、刺激を受けつつ拝見しました。

どなたも今後の市民生活の糧となるご経験をされたことと思いますが、発見したこと・やってみたいことを話し合える人たちがいて、それぞれの知恵と技を持ち寄り、手分けして力を合わせて何事かをなし遂げる——その一連が何よりの収穫だったのではないのでしょうか。「あ、まちづくりの第一歩は仲間探しなのかもしれない」と気付かされた2024年のスクールでした。仲間探し、卒業後にこそ続けていただきたいです。お疲れ様でした！

三谷 卓摩（UDCM プロジェクトディレクター）

去年までのディレクターの立場から、高専生と一緒に新鮮な気持ちで体験させてもらいました。

まちなか班は自分がディレクターの時に携わることができず、心残りに感じていたL字地区を活用してくれたことが嬉しかったです。

垣生班は昨年の伊予絃から今年はたこが出てきて、ほっといたらなくなってしまうようなものが郊外にはひっそり眠っていることを改めて感じました。

桑原班は参加者の個性あふれる多様な取り組みで、峠の写真をみながら階段をのぼり、和菓子を食べながら語りを聞き、水路の歴史パネルを見て理解するなど、五感のつながりを楽しめました。

パーソン班は単なる集計グラフではなく自ら回答を確認するクイズ形式になっていたことから、属性による外出状況の違いなど自分の感覚とずれているところもあり、





Project Member

アーバンデザイン・スマートシティスクール松山 2024
プロジェクトレポート 2024.7 - 2025.1

相澤壮一郎 / 赤井あずみ / 浅子佳英 / 池川芽衣 / 池本悠華 /
石飛直彦 / 井手之上采 / 伊藤香織 / 内田智尋 / 大野利恵 / 大政純麗 大政
璃奈 / 大山雄己 / 大山真央 / 尾形愛実 / 越智さくら / 小野悠
片岡由香 / 片山暁斗 / 川中榛名 / 栗林朗子 / 黒川美空 / 小山真央
近藤美咲 / 近藤翔太郎 / 篠永悠斗 / 柴岡莉桜 / 清水凜 / 進藤小雪
杉田真理子 / 関厚子 / 高橋ひより / 瀧川倫太 / 竹内仁美
竹内加寿美 / 武田裕奈 / 田中一浩 / 谷淵雄太 / 谷村凜久 / 中野靖子
中山真里 / 西澤徹夫 / 西原歩佳 / 羽藤英二 / 花本悠輔 / 林夏衣
日野順子 / 弘中琴絵 / 古崎杏里 / 星加有希奈 / 前あゆみ / 正岡拓朗
増田慧樹 / 松尾悠馬 / 松村暢彦 / 松本啓治 / 的場風香 / 真鍋一宏
三谷卓摩 / 村上雄亮 / 元屋地伸広 / 森純平 / 森實啓介 / 諸星宏典
矢野ひなの / 山路大智 / 山地桃加 / 山下真奈実 / 山之内崇
山本あい / 山本まゆ香 / 米倉日菜詩 / LaureenAttolou

2025 年 3 月発行

企画
編集 松山アーバンデザインセンター (UDCM)

一部
写真 元屋地伸広

発行 松山アーバンデザインセンター (UDCM)

住所：愛媛県松山市花園町 4-9 岡田ビル 1 階





Urban Design Center
Matsuyama